

教育課程の再編成 その2 (中間まとめ)

～各部の実践的課題研究と卒業生の実態調査をととして、教育課程再編成の手がかりを探る～

長崎大学教育学部附属養護学校教官

長崎大学教育学部教官 後藤ヨシ子・宮崎正明

小原達朗 ・平田勝政

I 全体研究について (宮崎耕二)

はじめに

1. 全体研究テーマについて
2. サブテーマについて
3. 研究目的
4. 研究内容
5. 研究方法

II 小学部の研究 (西岡哲男, 岡田健治, 山中祐造, 葉師杏奈, 荒木都, 中村哲哉, 工藤傑史, 青木真理, 後藤ヨシ子)

1. 小学部研究テーマについて
2. 研究目的
3. 研究内容と方法
4. 研究の経過
5. 今後の研究計画

III 中学部の研究 (藤原浩, 川波寿雄, 岡元和正, 高谷有美, 伊東功, 川尻暁子, 辻利幸, 松下幸美, 永松公子, 光武きよみ, 宮崎正明, 小原達朗)

1. 中学部研究テーマについて
2. 研究目的
3. 研究内容と方法
4. 研究の経過
5. 今後の研究計画

IV 高等部の研究 (山田勝大, 田口眞弓, 宮崎耕二, 和田充紀, 今里順一, 森川元, 吉井麻弥, 上田文啓, 井手純郎, 平田勝政)

1. 高等部研究テーマについて
2. 研究目的
3. 研究内容と方法
4. 研究の経過
5. 今後の研究計画

V 全体研究のまとめ (宮崎耕二)

I 全体研究について

(全体研究テーマ)

教育課程の再編成 その2 (中間まとめ)

～各部の実践的課題研究と卒業生の実態調査をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る～

はじめに

本校では、3期7か年の計画で「教育課程の再編成」という全体研究テーマのもと継続研究を行っている。3期のサブテーマと研究期間、公開研究発表会の期日は次のとおりである。

	サブテーマ	研究期間	公開研究発表期日
研究その1	アセスメント機能をもった内容表試案を作成し、指導形態等の改善の手がかりを探る	平成11年8月から 平成14年3月	平成14年2月22日
研究その2 (本研究)	各部の実践的課題研究と卒業生の実態調査をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る	平成14年4月から 平成16年7月	平成16年6月発表 予定
研究その3	21世紀の教育課程を創造する(仮)	平成16年8月から 平成18年7月	平成18年6月発表 予定

本研究は研究その2である。研究その1の成果と課題を受け、各部の教育課程上の課題解決を図るとともに、卒業生の実態調査を行うなかから、教育課程再編成のための手がかりを探ることを目的としている。研究その2は、平成14年4月から平成16年7月までの研究であるが、本紀要では平成14年度に行った各部の実践的課題研究の基礎研究の経過について報告する。

研究その2の特徴は、各部の研究を長崎大学教育学部の教官と共同で進めた点にある。小学部は後藤ヨシ子先生、中学部は宮崎正明先生・小原達朗先生、高等部は平田勝政先生(以下、「共同研究教官」と記す)に各部の研究組織に加わっていただくとともに全体研究についても、専門的見地から御意見をいただきながら研究を進めた。学部と附属学校とが共同で研究を行うことは、学部・附属学校に求められた大きな課題であることから、今回の研究においてその足がかりができたことは大きな成果であった。

今回の報告は、研究の途中経過を記したものであるが、忌憚のない御指導・御助言・御批判をいただき、来年度の研究をさらに深化・発展させたいと考えている。

1. 全体研究テーマについて

今、私たちを取り巻く社会、そして障害児を取り巻く環境は急速に変化している。こうした変化に適切に対応するため、盲・聾・養護学校の学習指導要領は平成11年3月に改訂された。学習指導要領では、完全学校週5日制の下で、児童生徒に自ら学び自ら考える力、豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力など、「生きる力」を育成することをねらいとし、さらに児童生徒の障害の重度・重複化や社会の変化をふまえ、一人ひとりの障害の状態等に応じたきめ細かな指導を一層充実することなどを改訂の基本方針としている。そして、障害の重度・重複化や社会の変化に対応して、指導の一層の充実を図るため、盲・聾・養護学校には、個別の指導計画、自立活動、総合的な学習の時間

の実施や、地域における体験活動、交流活動の充実などについて、地域や児童生徒等の実態に応じた創意工夫した取り組みが求められている。

ところで私たちは、昭和56年度に編成された教育課程に基づいて日々実践を行い、学期末や年度末には実践の反省を教育課程にフィードバックしながら、教育課程の改善を積み重ねてきた。その成果をふまえ、学習指導要領の改訂や21世紀の特殊教育の在り方の答申を受けて、教育内容を見直し、学校教育目標、めざす人間像など、本校教育の理念を再構築する必要があると考え、「教育課程の再編成」の研究に取り組むこととした。

2 サブテーマについて

(1) 研究その1の成果と課題

研究その1では、教育課程に関連した学校教育の動向をとらえること、教育課程のとらえを行うこと、内容表試案を作成することを、主な研究目的とした。教育課程の定義は次のとおりであり、これは研究その2にも引き継がれている。

教育課程の本校の定義：子ども一人ひとりにどのような内容を準備するかという指導の内容とその構造化と、それをどのようなまとまりの計画・方法で提供するかという戦略的な手だて。

内容表試案については、小・中・高等部それぞれの部で基礎・基本として厳選した教育内容を全校的に整理し段階的に配列することで、本校教育の12年間においてすべての子どもたちが学ぶべき基礎・基本となる教育内容の一覧表を作成した。

しかし、研究その1において次のことが課題として残った。

— 研究その1の課題 —

- ① 研究その1で整理した教育内容を指導形態に振り分けるためには、「指導形態」の在り方を検討する必要があるが、研究その1では、そこまで検討を行うことはできなかった。また、研究その1では部ごとに「厳選の視点」を設け教育内容を基礎的基本的なものに厳選したが、全校的に一貫した厳選の視点を見いだすまでには至らなかった。そして、指導形態や全校一貫した厳選の視点を検討するためには、学校教育目標、めざす人間像、一貫教育の視点、部教育目標、部の教育の基本的な考え方といった、本校教育の理念について検討する必要があること。
- ② 卒業生の生活の実態を調査し、教育課程にフィードバックする必要があること。
- ③ 大学との共同研究を推進すること。

(2) 研究その1の課題を解決すべく研究その2を行う必要性

【研究その1の課題①・②について】

本校教育の理念を検討する基礎作業として、各部で教育課程上の課題を明らかにした。その結果、次のことがクローズアップされた。

小学部：現教育課程で指導が難しい子どもに応じる教育課程とは？

中学部：「思春期」をよりよく乗り越えるにはどのような教育が必要か？

高等部：小・中学部で培ってきた全体的な発達の力を進路としてどのように結実させるか？

全校：生活中心の教育課程である以上、卒業後の生活の実態を社会変化の節目ごとに調査し、卒業後の生活において何が必要かという視点から、教育課程を点検する必要があるのでは？

これらの課題はいずれも、教育課程を再編成するにあたり解決すべき課題であり、なおかつ、これらの解決を図ることで、本校教育の理念につながる重要な提言が得られると考えた。そこで、サブテーマを「各部の実践的課題研究と卒業生の実態調査をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る」

とし、部ごとに下記のテーマを設定して実践研究を行うとともに、卒業生の実態調査を実施するなかから、教育課程再編成につながる手がかりを探りたいと考えた。各部の研究テーマと提言する事柄は下記のとおりである。なお、全校的な課題としてあげられた卒業生の実態調査に関しては、「本人の卒業後の生活の調査」と「卒業生の保護者への本校教育課程に関するアンケート調査」を研究部が主体となって行い、これらの分析結果を教育課程再編成に生かしていきたいと考えた。そして各部・研究部の研究をとおして得られた教育課程再編成への提言と、研究その1の成果をもとに、研究その3において新たな教育課程の創造を行いたいと考える。

部	部研究テーマ	提言する事柄
小学部	一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育課程再編成の手がかりを探る ～現教育課程での指導の難しさを感じる子どもの事例検討をとおして～	一人ひとりに応じる柔軟な教育課程の在り方を提言する
中学部	思春期を迎える中学生の発達やからだの学習の検討をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る ～諸検査、調査研究、文献研究をふまえて～	思春期の発達と、性教育に関する地域・社会などのニーズの視点から性教育の在り方を見直し、小・高等部とのつながりを提言する
高等部	自ら進路を切り拓く生徒を育てる「進路学習」の在り方の検討をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る ～卒業生の実態調査と高等部段階における個々の発達をふまえて～	進路指導の視点から、本校教育におけるめざす人間像や学校教育目標・一貫教育の視点などを提言する

【研究その1の課題③について】

学部と附属学校とが共同で研究を行うことは、現在、学部と附属学校に課された大きな課題である。そこで、研究その2を推進するにあたり、各部の実践的課題研究のテーマに精通した学部教官に共同研究者として加わっていただき、共同で研究を進めることで研究の質の向上を図りたいと考えた。

3. 研究目的

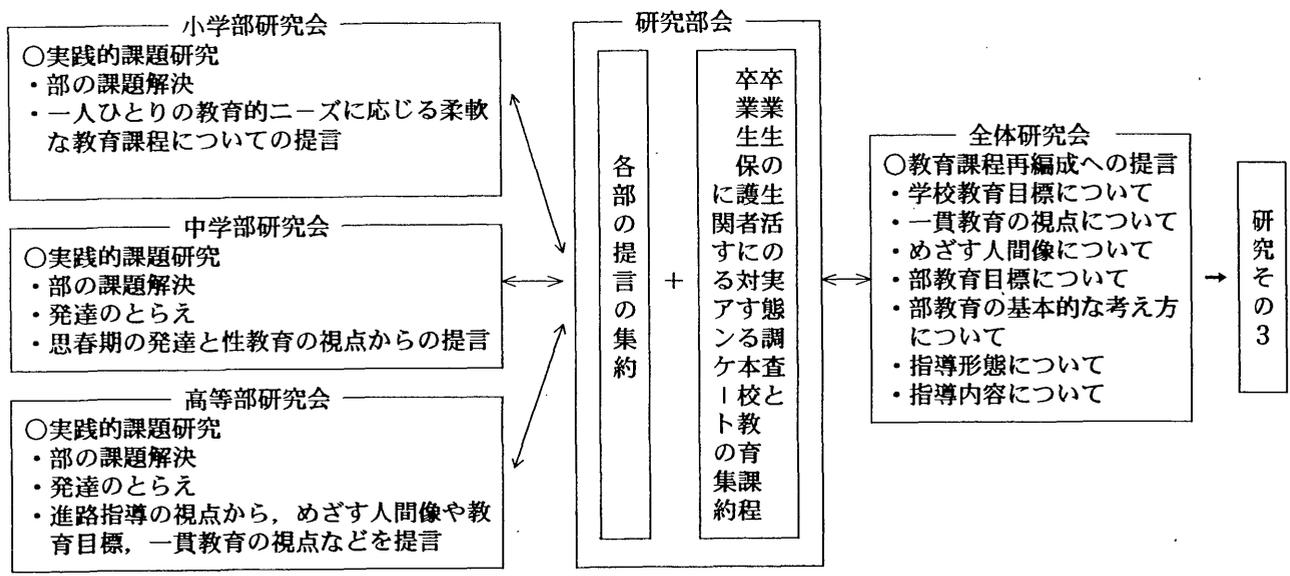
各部の教育課程上の課題となる分野の実践研究と卒業生の実態調査を行うことをとおして、学校教育目標・めざす人間像・一貫教育の視点・部教育目標・部教育の基本的な考え方・指導形態の枠組みなど、教育課程再編成につながる手がかりを得ることを目的とする。

4. 研究内容

- (1) 各部の教育課程上の課題となる分野の実践研究を行うなかで次のことを明らかにする。
 - 各部の発達のとらえを行う。
 - 学校教育目標・めざす人間像・一貫教育の視点・部教育目標・部教育の基本的な考え方・指導形態の枠組みなど、教育課程再編成につながる提言を行う。
 - 研究その2における各部の役割にそって、教育課程再編成に向けた提言を行う。
 - 各部の実践的課題研究の分野の授業を組織する。
- (2) 卒業生の生活の実態調査と卒業生の保護者への本校教育課程に関するアンケート調査を行うことで、卒業後の生活の視点から教育課程再編成のための手がかりを探る。
- (3) (1)(2)を融合し整理することで、研究その3に向け、教育課程再編成のための提言を次の視点からまとめる。
 - 一貫教育の視点の共通理解 ○学校教育目標 ○めざす人間像 ○部教育目標
 - 各部の教育課程の基本的な考え方 ○指導形態の枠組み など

5. 研究方法

(1) 研究その2の構想



H14・4～H15・12

本紀要は、この範囲の基礎的研究の経過を報告した

H15・7～H16・7

(2) 研究計画

年	月	研究内容
H14 年度	4・5・6・7・8	○全体研究テーマ・研究目的・研究方法の検討 ○部研究分野の決定、共同研究教官の決定
	9・10	○全体研究テーマ・研究目的・研究方法の決定（第1回全体共同研究会（9/10）※1） ○部研究構想・部研究計画の決定
	11・12・1	○部研究テーマ・研究目的・研究方法の決定（第2回全体共同研究会（12/2）※2） ○部研究内容に関する基礎研究 ○卒業生の生活についてのアンケート調査・本校卒業生保護者への本校教育についてのアンケート調査の実施
	2・3	○全体・各部の研究のまとめ（教育実践総合センター紀要執筆）
H15 年度	4	○全体・部研究構想の再検討
	5・6・7・8・9 10・11・12	○各部の授業研究 ○各部からの教育課程再編成の提言 ○教育課程再編成の提言の集約・アンケート調査の集約と各部へのフィードバック（研究部） ○教育課程再編成の提言についての全校的視点からの検討
	1・2・3	○教育課程再編成の提言について全校的視点からのまとめ ○全体・部研究のまとめ（長崎大学教育学部附属養護学校紀要執筆）
H16 年度	4・5・6・7・8	○公開研究発表会準備 ○公開研究発表会（6月） ○全体・部研究の反省と研究その3の展望

※ 本紀要では、太線で囲った部分の内容について報告した。

※1：第1回全体共同研究会は、本校全教官と共同研究教官である後藤ヨシ子先生、小原達朗先生が参加して実施した。

※2：第2回全体共同研究会は、本校全教官と共同研究教官である小原達朗先生、平田勝政先生が参加して実施した。

なお、※1※2以外にも、各部において随時、共同研究教官との共同研究を行った。

（宮崎耕二）

II 小学部の研究

(小学部研究テーマ)

一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育課程再編成の手がかりを探る
～現教育課程での指導の難しさを感じる子どもの事例検討をとおして～

1. 小学部研究テーマについて

障害のある子どもへの教育は、一人ひとりのニーズを尊重する視点に立って行われる。本校においても、個に応じた教育実践を展開しようと、日々、その努力を続けてきたが、近年、このような努力では対応できないのではないかと感じられる事例が増えつつあり、また、子どものニーズそのものも多様化の方向にある。これらのことは、現在、私たちが取り組んでいる日々の教育活動が、子ども一人ひとりの教育的ニーズに沿ったものとして展開されているかどうかを、緊急に検討する必要があることを示している。

平成11年3月に改訂された、盲・聾・養護学校の学習指導要領は、障害の重度・重複化や社会の変化をふまえ、一人ひとりの障害の状態等に応じたきめ細かな指導を一層充実することなどを基本方針としている。また、「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」（21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議，2001）では、「障害のある幼児児童生徒の視点に立って一人一人の特別な教育的ニーズを把握し、必要な教育的支援を行う」ことを基本的な考え方としている。こういった視点に立ち、21世紀にふさわしい教育課程を創造していくためには、現行の教育課程が、個の教育的ニーズに応え得るものであるかを、検討しておくことが必要である。

以上のような理由から、小学部では、まず、教育的ニーズとは何かを明らかにしたうえで、教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方を検討し、そこから一人ひとりの教育的ニーズに応じた柔軟な教育課程編成の手がかりを探っていきたいと考えている。

本研究をとおして得られた研究成果は、個の教育的ニーズを教育課程に反映させ個に応じた指導・支援を行うという観点から、中・高等部にも有用な教育課程再編成の手がかりとなるであろうと考える。

研究その1において、小学部では、発達の視点から内容表試案の整理を試みたが、「教育内容の提供の在り方」の再検討については課題として残されていた。本研究では、一人ひとりの子どもの姿から把握された教育的ニーズを、授業へと結びつける教育実践を試行する。この教育実践をとおして生じた様々な問題への対応を検討することで、内容表試案活用を含め、「教育内容の提供の在り方」についても、その手がかりが得られるのではないかと考える。

2. 研究目的

現教育課程において指導の難しさを感じる子どもの事例をもとに、教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方を検討することをとおして、一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育課程再編成への手がかりを探る。

3. 研究内容与方法

(1) 教育的ニーズとは何かを明らかにする

教育的ニーズについて、先行研究調査および文献研究を行い、実践事例の検討をとおして、小学部における教育的ニーズのとらえを行う。

(2) 「教育的ニーズに応じた授業づくりシステム」を構築する

一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援を行っていくために、「教育的ニーズに応じた授業づくりシステム」の構築に取り組む。このシステムは、以下の二つのシステムから構成されるものとする。

① 教育的ニーズを把握するシステム（アセスメントシステム）

教育的ニーズを把握する一連の流れを明らかにし、システム化する。

- 発達のニーズのとらえ方を明らかにする。
- 生活のニーズのとらえ方を明らかにする。
- 発達のニーズと生活のニーズとをすり合わせ調整して、教育的ニーズとしてとらえる方法を明らかにする。

② 教育的ニーズに基づく授業を計画するシステム（プランニングシステム）

①の手続きから得られた一人ひとりの教育的ニーズを、授業へ反映させていくためのプロセスを具体化する。

(3) 一人ひとりの教育的ニーズに応じた柔軟な教育課程への再編成に向けた手がかりを探る

上記の(2)①～②のシステムに基づいて、実際に、「指導の難しさを感じる子ども」の事例を検討していく過程において生じた様々な課題に、具体的にどのように対応していくかを検討し、解決していくなかで、教育内容の枠組みや指導形態などの在り方といった柔軟な教育課程再編成へ向けた手がかりを得る。

「指導の難しさを感じる子ども」の教育的ニーズを把握し、それに沿って、一人ひとりに応じた授業実践に取り組むなかで、たとえば、下のような課題に直面するであろうと予測される。

- 教育的ニーズをふまえた、個別の指導計画の在り方を再考し、個別の指導計画と教育課程との関係を明確にする。
- 一人ひとりの教育的ニーズをもとにした授業を行う際の、個別、小集団、あるいは全体指導といった多様な集団編成の視点を検討する。
- その他

(荒木 都)

4. 研究の経過

今年度は、「一人ひとりの教育的ニーズに応じた教育課程再編成の手がかりを探る」ための基礎研究を行った。この再編成の手がかりは、実践事例の検討をとおして「教育的ニーズに応じた授業づくりシステム」を構築する過程で生じるさまざまな問題点をとらえることによって、得られるものであり、と考えられる。

教育的ニーズに応じた授業づくりシステムは、教育的ニーズを把握するシステム（アセスメントシステム）と、教育的ニーズに基づく授業を計画するシステム（プランニングシステム）から成るものであるが、今年度は、アセスメントシステムを構築するために、「(1) 教育的ニーズのとりえ」、「(2) 発達のニーズのとりえ方」、「(3) 生活のニーズのとりえ方」についての検討を行った。

(1) 教育的ニーズのとりえ

教育的ニーズのとりえについては、各学校などにおいて研究が進められてきており、それらを概観すると、概ね、次の二つの側面からとりえようとしているように思われる。一つは、教育的ニーズを、個のニーズと環境からのニーズ、あるいは両者の関連のなかでとりえようとするものであり、もう一つは、「保護者・教師・社会からのニーズ」などのように、「願い・期待」といった観点からとりえようとするものである。

また、「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」（21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議，2001）からは、ニーズの定義そのものについてはふれられていないものの（金子，2003，竹林地，2001），ニーズをとらえる視点として、次の四つのもの、すなわち「ア 地域の人々との交流による生活基盤の形成」「イ 主体的に社会参加をし、心豊かに生きるための生きる力の育成」「ウ 生涯学習の機会」「エ 就労支援や生活支援」をあげることができる（竹林地，2001）。知的障害が、知的発達のレベルだけでなく、自立のための支援の観点からとらえられるようになってきていることもあり、教育的ニーズについても、地域での生活やライフサイクルを考慮してとらえることが検討されなければならない（竹林地，2001）。

清水(1997)は、何が教育的ニーズを構成するかは、その社会の文化などに規定される相対的なものであり、子どもの生活の中心となるものが、生活年齢の上昇に伴って変化するにつれて、ニーズも変化するとし、子どもの生活に目を向けてニーズをとらえることの重要性について言及している。

また、越野(1997)は、ニーズの診断は、個体内要因と環境要因、及び、その相互作用を、総合的に明らかにするものでなければならないとし、アメリカ精神遅滞学会(AAMR)による精神遅滞者のニーズのとりえ、すなわち「精神遅滞者のニーズは、知的機能及び適応スキル、心理的・情緒的問題、身体的・健康的・病理学的問題、環境的問題の四つの次元において明らかにされなければならない」ということを、参考にすべき視点として紹介している。

このように、概観すると、教育的ニーズは、個体としてのニーズと、生活とのかかわりのなかで生じるニーズを、願いや期待なども含めて、ライフサイクルあるいはライフステージを考慮しながら、検討していく必要があるのではないかと考えられる。

そこで、小学部では、目下検討を進めている途上ではあるが、教育的ニーズを次のようにとらえることにしたい。

教育的ニーズ	=	子どもの発達のニーズと生活のニーズを、すり合わせ調整する作業をとおして、相互関連的にとらえた学校教育活動の対象となるもの
--------	---	--

① 発達のニーズ

発達のニーズとは、子どものありのままの発達の状況からとらえたニーズのことであり、子どものよりよい発達をうながすために、今必要であると考えられるニーズのことである。ただし、発達の状況を把握するだけでなく、子どもの障害の特性、学習の状況、また、AAMRの提案する心理的・情緒的問題、身体的・健康的・病理学的問題、なども含めて、できるだけ客観的に子どもの実態をとらえて、発達のニーズを把握することが必要である。

発達の視点の重要性については、研究その1においても示したとおり、適切な指導や支援のためには不可欠の視点であるため、個体としてのニーズを明らかにする際も、中心に据えたい視点である。

また、よりよい発達をうながすとはどういうことかなどについて、さらに検討を進めることによって、発達のニーズとしての優先課題の把握の仕方なども、より明らかになっていくと考えられる。

② 生活のニーズ

生活のニーズとは、現在のライフステージにおいて、子どもの生活をより豊かにするためのニーズであり、将来の生活やライフステージも想定しながら、今必要であると考えられるニーズのことである。学校生活、家庭生活、地域生活についての保護者の願い（可能な場合は、子ども自身の願いも含めて）に、教師の願いや社会的な要求・要請などの視点をクロスさせることで、優先させるべき生活のニーズがとらえられるのではないかと考え、検討を進めている。

③ 発達のニーズと生活のニーズとの相互関連による学校教育活動の対象としてのニーズ

発達のニーズから生活のニーズを見ることによって、子どもに優先されるべき具体的な課題（教育活動）がより明確になることが予想される。そしてまた、その逆の場合も同様であろうと思われる。

そこで、発達のニーズと生活のニーズをすり合わせ調整する作業をとおして、相互関連的にとらえた学校教育活動の対象となるものを、教育的ニーズとしてとらえる。

学校教育活動の対象をどのような範囲でとらえるかということについては、家庭や他機関との連携によって把握されたニーズなど、子どものニーズの広がりや考慮に入れて、検討されなければならない。直接的な指導・支援ばかりでなく、教師が家庭や地域に赴いて指導を行うなど、間接的な指導・支援も含めて、学校教育現場として、できること・なすべきことを明らかにし、一人ひとりの子どもに応じて、学校教育活動の対象となるものを、とらえていく必要があると思われる。

現在、次の図一1に示す手順で、教育的ニーズを把握していこうと考えている。

(西岡哲男)

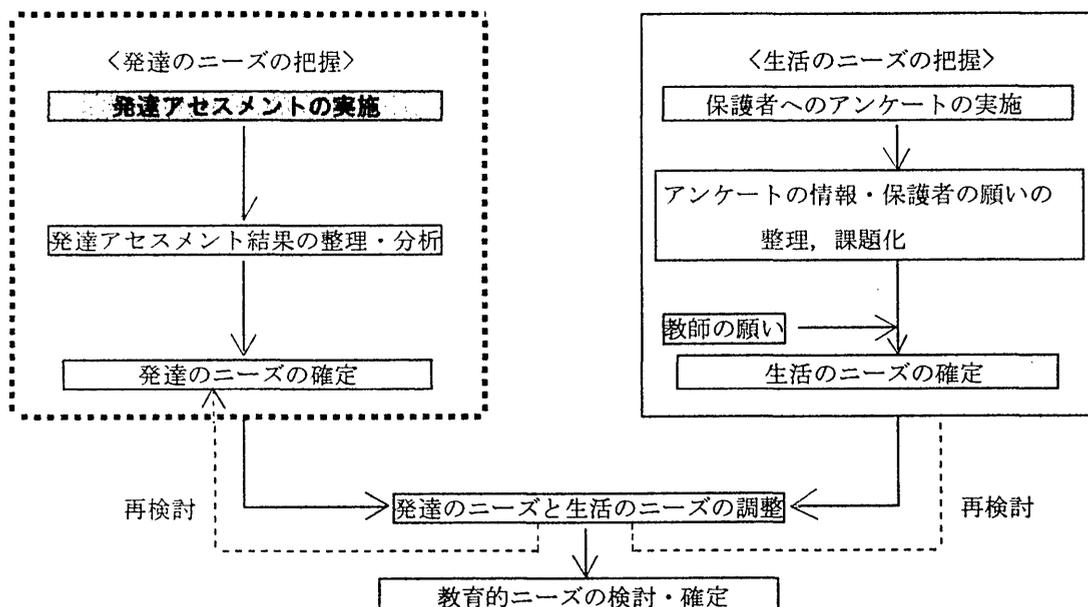


図-1 教育的ニーズを把握するまでの手順

(2) 「発達のニーズ」のとりえ方

① 発達のニーズを明らかにするまでの手順

小学部では、図-1の点線で囲んだ部分に示したような手順で、子ども一人ひとりの発達のニーズをとらえようと考えている。■の部分今年度の研究で試行した。

② 発達アセスメントの方法

「発達のニーズ」をとらえるには、まず、個々の全人的発達の様相を客観的に把握することが不可欠である。子どもの発達の状況を把握するための情報収集は、いくつかの方法によってバッテリーを組むことで、多角的に行われることが望ましい。発達の状況を把握するためには様々な方法が用いられているが、それらは概ね、以下のようにまとめることができる。

○ 標準検査による把握

いくつかの検査を併せて実施することにより、子どもが全体として到達している発達水準とプロフィールが把握できる。たとえば、言語や認知、運動などの発達水準を把握することで、学習や行動のつまずきの原因を推測するなどして、発達に応じた課題を明らかにすることができる。

○ 行動観察による把握

標準検査によって「発達の道すじ」が把握できるが、その細かい部分を埋めていくことが、「行動観察」の役割である。また、標準検査によって把握された力が、生活場面ではどのように見られるかなど、「発達の広がり」を把握する役割も持っている。さらに行動観察からは、標準検査では得られにくい情緒面や道徳性・社会性の発達、行動特徴を把握することができる。

○ 面接による把握

保護者や医療、訓練機関など、日頃、かかわりのある関係者からの情報収集を行う。生育歴や教育歴、これまでの医学的な診断・検査結果などの情報を聞き取ることによって、発達の経過を把握する。また、行動観察からは推察すること難しい「内面の発達」も把握することが可能である。

本研究その2においても、この三つの方法によって、指導の難しさを感じる子どもの発達の状況を把握しようと考えている。具体的には以下にあげるような方法を取り入れることにした（本年度試行した方法を太字で示す）。

- 標準検査による把握・・・**新版K式発達検査、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査**
田研・田中ピネー知能検査、新版S-M社会生活能力検査
障害に応じた検査
- 行動観察による把握・・・学習場面や日常生活場面での行動観察
- 面接による把握・・・保護者、医療機関、訓練機関との面接

(岡田健治)

標準検査の特徴と目的について、整理したものを、以下に示しておく。

ア 知能検査

○ 田研・田中ピネー知能検査

子どもの知的特性を知ることができる。検査中の子どもの反応を記録していくことで、知的特性の詳しい内容も把握することができるため、指導場面に生かすことができる。

イ 社会成熟能力検査

○ 新版S-M社会生活能力検査

具体的生活での処理能力を把握することができる。知能検査で測定しきれないものを補足する役割がある。また、知能検査の結果と比較することで、より子どもの実態を知ることができる。

ウ 発達検査

○ 新版K式発達検査

発達の遅れの大きい子どもにも適用でき、1歳6か月以降の発達項目が充実している。研究その2で取り上げようと考えている指導の難しさを感じる子どもたちの発達水準も把握できる。1歳6か月以降の発達項目を見ると、主に認知面などにおいて具体的な発達の状況がわかるため、指導場面に生かしやすい。

○ 遠城寺式・乳幼児分析的発達検査

発達年齢と発達項目がわかりやすく配列してあるため、発達状況を分析的に評価できる。その結果を発達グラフにあらわすことができ、子どもの発達プロフィールが一目でわかるため、発達の全体像をとらえるのに適している。

エ 障害に応じた検査

障害に応じたより詳しい発達の特徴を把握することができる。

たとえば、自閉的な傾向のある子どもには、必要に応じて、自閉症・発達障害児教育診断検査（PEP-R）などを実施する。PEP-Rは、発達の視点からだけでなく、コミュニケーションの視点や病理的な視点からも、子どもの特徴を見ることができる。また、この検査では、子どもの反応を、合格、不合格という基準で評価するだけでなく、「芽生え反応」としてとらえることができる。「芽生え反応」に着目することによって、指導すべき課題が把握しやすくなる。

その他、子どもの障害に応じて必要になると考えられる諸検査については、検討中である。（青木真理）

③ 「発達のニーズの把握」のための今後の課題

いくつかの標準検査を実施することにより、多様な角度から子どもの発達水準やプロフィールが明らか

になり、そこから指導・支援につながる発達のニーズが見えてくるだろうという予測をしている。しかし、今年度試行した標準検査の結果の整理・分析については次年度の課題として残っている。

以下に、「発達のニーズの把握」のための今後の課題を示しておく。

＜「発達のニーズの把握」のための今後の課題＞

- 試行した標準検査の結果の共通理解
- 試行した標準検査の分析結果を指導に生かすための視点の明確化
- 発達の状況を把握するために必要な標準検査の再検討
- 発達アセスメントをするための、バッテリーの組み方の検討
- 発達のニーズのとらえの具体化
- 発達のニーズとしての優先課題の把握の視点および方法の検討

(岡田健治)

(3) 生活のニーズのとらえ方

生活のニーズとは、現在のライフステージにおいて、子どもの生活をより豊かにするためのニーズであり、将来の生活やライフステージも想定しながら、今必要であると考えられるニーズのことである。

一人ひとりの生活のニーズに応じた指導・支援を展開するためには、個々の子どもがおかれた状況や、そこでの実態をできるだけ正確かつ客観的に把握し、あわせて保護者の希望・願いを聞き取ることにも必要になる。そこで、子どもたちの生活の範囲を、学校のみならず、家庭生活、地域生活に広げて、子どもの情報を収集するための保護者を対象としたアンケート用紙(生活地図も含む)を作成し、次のような手順で、次年度試行することを検討している。

- i) 年度当初にアンケートを実施し、家庭訪問で生活情報や保護者の希望・願いを確認する。
- ii) アンケートで得られた基礎情報および保護者の願いを整理し、課題化する。
- iii) 日頃の観察や継続している課題のなかから、教師の側から必要と思われる課題も含め、生活のニーズを明らかにする。

価値観の多様化とライフスタイルを重視する今日の教育では、子どもの個性を尊重し、家族を含めた子どもの生き方や考え方、将来の希望を保護者と十分に話し合っ指導・支援に反映させることの重要性が言われている。その際、学校での様子や担任からの要望・願いも保護者に伝え、双方向的な情報の交換に努めるなかで、家庭との連携を積極的に進めることが大切であると考えている。

アンケートの項目については以下の内容を選び出した。

＜生活情報アンケートの項目および内容(案)＞

(1) 家庭での様子	遊び	○好きな・嫌いな遊び ○家族や近所の人とのかかわり
	食事	○食事の量 ○偏食の有無 ○おやつ(量・時間)
	睡眠	○睡眠時間 ○起床・就寝時間
	排尿・排便	○排尿・排便の介助について ○夜尿の有無
	清潔・着脱衣	○お風呂・歯磨き・着替えの介助について
	一日のスケジュール	○平日・休日の過ごし方

(2) 施設利用	利用している施設 (医療機関や訓練施設も含む)	○曜日・時間 ○内容 ○求めていること
(3) 保護者の願い	生活面	○身辺処理 ○偏食・過食 ○食欲 ○手伝い ○調理 ○遊び・余暇 ○小遣い ○地域との関係
	学習面	○勉強 ○コミュニケーション ○作業
	身体・情緒・行動面	○姿勢・動作・運動 ○情緒の安定 ○問題行動 ○仲間関係 (対人関係)
	将来について	○進路の希望 ○将来の生活像
(4) 生活地図	○子どもの自宅を中心とした生活圏を表す地図	

(中村哲哉, 工藤傑史, 山中祐造)

5. 今後の研究計画

小学部の研究は、「現教育課程における指導の難しさを感じる子どもにどのように対応していくか」という小学部の緊急課題を出発点として、「一人ひとりの教育的ニーズに応じる」新しい教育課程編成に向けた手がかりを探ることを目的として行っている。

今年度の研究の過程では、研究の出発点となった「指導の難しさを感じる子ども」たちの姿を、現行の教育課程における指導のなかで見つめ直したり、臨床心理士の協力を得ながら、これまでの諸検査に加えて、新たに新版K式発達検査を実施したりすることに取り組んだ。今回の報告で、詳しく述べることはできなかったが、検査の結果からは、子どもの「伸び盛り」の面があらためて見えてきたり、また、集団学習のなかでの個別の配慮・対応については、その在り方に検討の余地のあることが明らかになったりと、まだ漠然としたものではあるが、次年度に向けた手がかりを得ることができた。

また、「教育的ニーズとは何か」というとらえを明らかにし、それをとらえる過程で必要な発達のニーズ、生活のニーズという教育的ニーズを構成する二つのニーズについても、それらのとらえ、および具体的なとらえ方を明らかにしようとした。次年度は、実際に、「指導の難しさを感じる子ども」の教育的ニーズを把握し、授業に反映させていくなかで、それらのニーズのとらえを、小学部のとらえとして明確にしていく必要がある。今年度は、「発達のニーズと生活のニーズをすり合わせ調整する作業」の具体的な内容は明らかにできなかった。

このような課題をふまえ、次年度は次のことに取り組んでいきたいと考えている。

(1) 教育的ニーズのとらえを、実践をとおして修正する

今年度の研究でとらえた「教育的ニーズ」を、事例の検討を重ねるなかで、修正し、最終的に小学部のとらえとして明確にしたい。

(2) 教育的ニーズに応じた授業づくりシステムを構築する

教育的ニーズのとらえをもとに、次年度は、「教育的ニーズを把握するシステム」、「教育的ニーズに基づく授業を計画するシステム」を、実際に、事例に基づく検討を行いながら構築する。今年度の積み残しの課題も含めて、次のことについて検討し、明らかにしていきたい。

ア 教育的ニーズを把握するシステム（アセスメントシステム）

- 発達のニーズおよび生活のニーズについての情報をどのように収集するか。
- 誰からのどのような情報をもとにして、教育的ニーズをとらえようとするのか。
- いつ情報を収集するか。
- どのような考え方や手順で、いつ、だれが、発達のニーズや生活のニーズを明らかにし、教育的ニーズとして確定するのか。原案を作成するのは誰か。
- 書式（様式）や表現の仕方、表現のレベルをどのようなものにするか。
- その他

イ 教育的ニーズに基づく授業を計画するシステム（プランニングシステム）

- 教育的ニーズをどのように個別の指導計画に反映させるか。
- 個別の指導計画と教育課程との関係をどのようにとらえ、授業づくりへとつなげるか。
- プランニングは、いつ、だれが、どのような書式（様式）で行うか。
- 個別の指導計画、授業計画案（単元別指導内容計画表）などの様式の再検討。
- その他

また、実際に、教育的ニーズを把握するにあたっては、学校と家庭との連携だけでなく、医療、福祉などの関係機関との連携を図る必要があると考える。

(3) 教育的ニーズに応じた指導・支援の在り方を検討することをとおして教育課程再編成の手がかりを探る

次年度は、実際に、「指導の難しさを感じる子ども」の事例検討のなかで、個の教育的ニーズに応じるための試行的な取り組みを行うが、そのためには、今まで以上に柔軟な教育課程を指向していく必要が出てくると推察される。たとえば、個別の指導計画と教育課程との関連づけの問題や、教育内容の枠組み（教育課程の柱）の問題、また、指導形態の在り方を含む方法論の問題などの、新たな課題が予測される。

このような課題への対応案を検討することで、教育課程再編成へ向けた手がかりが得られるのではないかと考える。

（荒木 都）

Ⅲ 中学部の研究

(中学部研究テーマ)

**思春期を迎える中学生の発達やからだの学習の検討をとおして、教育課程再編成の手がかりを探る
～諸検査、調査研究、文献研究をふまえて～**

1. 中学部研究テーマについて

中学部では、学校教育目標や部教育目標、中学部で掲げる5つの基盤^{注1)}などの理念のもと20年以上にわたり思春期にある生徒に教育を展開してきた。そして、近年の社会変化や教育界の動向に伴い、教育課程再編成の研究に取り組んだ。「教育課程の再編成 研究その1」においては、私たち指導者が子どもにぜひ学ばせたい厳選された内容(以下、「中核的内容」と記す)の範囲と順序性を明らかにした内容表試案を作成した。内容表試案を作成する過程において、中学部では中核的内容を導き出すための厳選の視点を考え、その視点をもとに中核的内容を導き出した。その研究過程において、部教育目標や5つの基盤の検討が必要であるという課題が明らかになった。また、厳選の視点や中核的内容を導く際には、思春期の発達を共通理解したり客観的にニーズを把握したりすることは不十分であった。このように、内容表試案は、思春期の発達やニーズを客観的に把握して作成されたとは言い難く、私たち教師集団の今までの経験や、本校の積み上げてきた実践がもとになっている。これらは、研究その1での大きな課題と考えている。

そこで研究その2においては、中学生時期(思春期)の発達を明らかにしてみたい。そして、思春期に必要な学習として展開しているからだの学習において、内容を選択・組織し指導計画を作成するうえで大切にしなければならないことを検討したり、他校での実態調査、卒業後に就労した施設での実態調査、保護者のニーズ調査をしたりして、性教育のニーズを具体的に明らかにしたい。また、小学部や高等部との内容のつながりを検討することで、小学部、高等部への提言を検討してみたい。このように中学生時期の発達をとらえたり、からだの学習の内容を選択・組織し指導計画を作成すればよいかなど検討したりすることをとおして、部教育目標や5つの基盤を見直すなど、中学部教育課程改善の手がかりを見出したいと考えている。

研究を進めるにあたっては、グループ研究組織として発達グループと、からだの学習グループの2グループを編成して基礎研究を行う。文献研究や、内容を選択・組織するうえで必要な情報を収集するために、大学教官と連携を図りながら効果的に研究を進めたい。また、調査研究や個々の生徒の諸検査の実施をとおして、ニーズをどのようにとらえていくか中学部として共通理解しながら研究を進めていきたい。

(川波 寿雄)

2. 研究目的

本校で学ぶ思春期を迎える中学生の発達のとらえや「からだの学習」の今後の内容の選択・組織の在り方、指導計画作成の在り方を検討する。

ことをとおして、中学部教育目標、5つの基盤の見直し、中学部教育課程改善の手がかりを探ることや他部への提言をすることを目的とする。

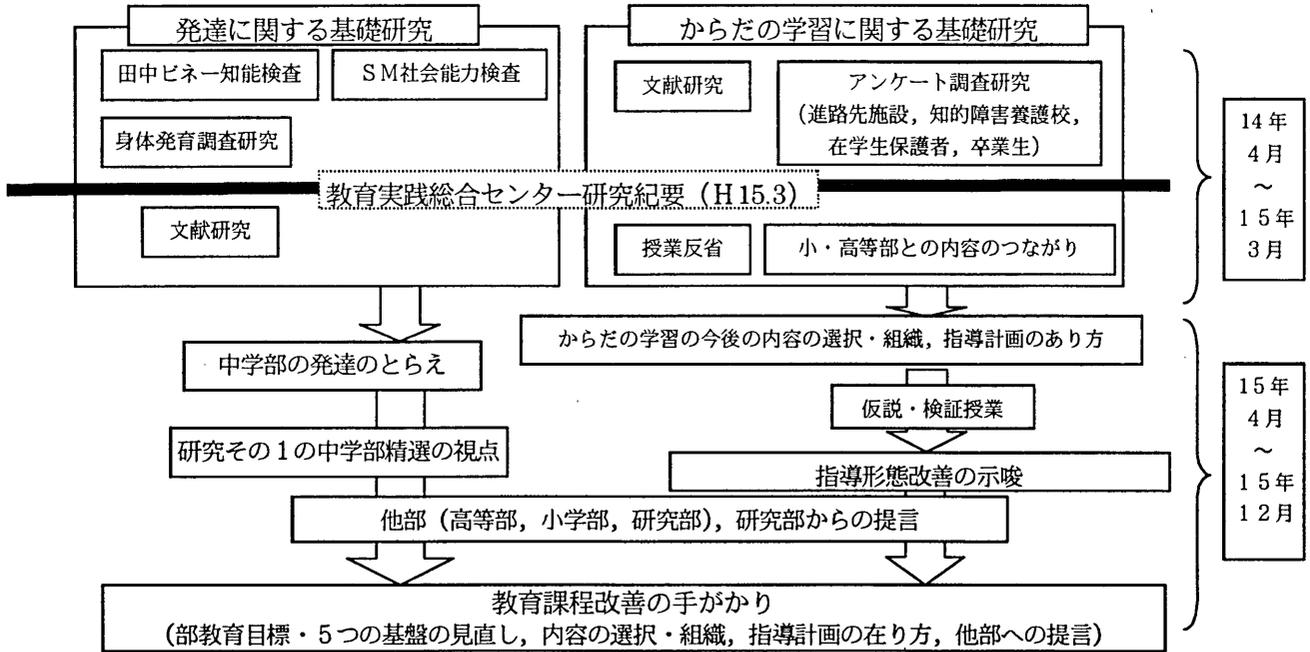
(川波 寿雄)

注1) 1981年の研究「教育課程の編成—教育課程編成の手順をさぐる—」では、小・中・高等部一貫教育において、中学部の教育は社会自立の基盤をつくる教育としてとらえ、次を5つの基盤としている

- 身体的基盤(じょうふな身体づくり)
- 社会的基盤(のそましい対人関係づくり)
- 精神的基盤(主体的な態度づくり)
- 働く意識の基盤(労働への意識づくり)
- 生活の基盤(生活する力づくり)

3. 研究内容与方法

以下に示す手続きに沿って、中学部の研究を進める。



(川波 寿雄)

4. 研究の経過と考察

(1) 諸検査から見た中学部生徒の発達

① 田中ビネー知能検査から

学習を進めるにあたって、生徒たちの知的発達の程度を知るとはとても重要である。その発達の程度を把握するために、私たちは中学部の教育課程で学んだ生徒の知能水準が何歳程度であるかを、田中ビネー知能検査を用い精神年齢 (MA) を調査した。中学生時期における各生徒の知能水準の変化を見られるように、小6卒業時のMAと中3卒業時のMAを調査した。対象にした生徒の総数は20名である。その結果を図-2に示す。

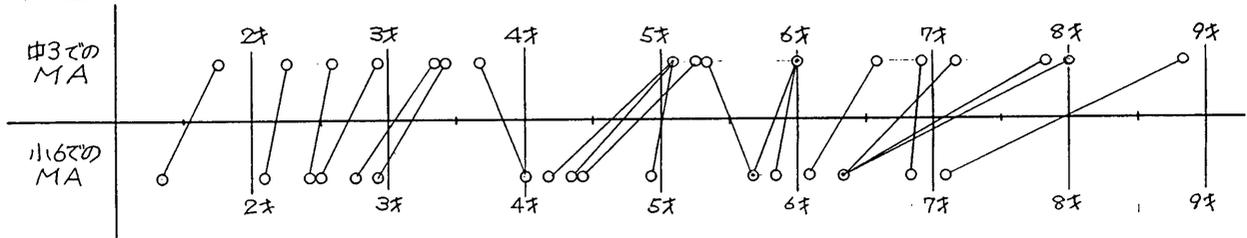


図-2 小6卒業時のMAと中3卒業時のMA

図-2からわかるように、中学部に在籍した生徒の知能水準は1歳から9歳くらいまでと、かなりの幅をもって散らばっていることがわかる。また、小6卒業時の知能水準と中3卒業時の知能水準との差、すなわち、3か年の発達の度合いを見ると、あまり変化していない生徒から、2歳近く変化している生徒までいる。これは中学部の指導がいかに難しいかを物語っている。

これらのことは、生活年齢をもとにして、単一に指導内容を選択したり、指導方法を設定したりしても、生徒たちの学習は成り立たないことをあらわしている。すなわち、中学部の教育では、知能水準の発達と生活年齢との関係を見据えながら、個に焦点を当て、今何を指導したらよいかという内容を選択したり、どんな方法がその子どもの知能水準に沿っているか、という指導方法の多様化を図ったりすることが求められている。

(藤原 浩)

② S-M社会生活能力検査から

小学部から在籍している現在中学部3年生の二人について、S-M社会生活能力検査を行った結果、各領域の発達の違いが見られた。それらの特徴的なことについて次に述べる(図-3, 図-4)。

図3に示す男子生徒は、「自己統制(わがままを抑え、自己の行動を責任をもって目的に方向づける能力)」については、それぞれの学年の検査ごとに伸びており、中学生になっても小6に比べて3歳伸びている。男子生徒は、これまでに身につけた良い形での習慣などを維持し、さらに新しく身につけていっているため、結果が毎回上昇していると思われる。本校の他の自閉症の生徒を見てみると、思春期において、身体的な変化への戸惑いと心のゆれが見られる生徒もいる。しかし、本男子生徒は、「意思交換」については、9歳台と比較的高いこと、また、好きな運動やピアノ演奏をするなど、いろいろな方法でモヤモヤした気持ちを発散することができていると考えられる。

逆に図4に示す女子生徒は、「自己統制」が小6に比べ中3では、4歳ほど下がっている。このような理由について考えると、これは、女子生徒は、小6時「身辺自立」や「自己統制」の項目において、○(できている)がついていた設問が、中3では×(できない)がついていることから、保護者に対して素直に応答しなくなり反抗的な態度をとるようになったためだろうと考えられる。このような自己葛藤や心のゆらぎなどは、健常児でも思春期における生徒には見られる傾向である。また、このような理由の他にも、女子生徒の結果において、全体的に小6のときに比べ、中3での結果が低くなっていることについては、記録者であった保護者の見方に変化があったためだということも考えられる。小学生時の保護者の期待する姿と、中学生時での保護者の期待する姿にずれがあり、そのことが検査結果に反映されたのではないかと推察することもできる。

「作業(道具の扱いなど作業遂行に関する生活能力)」については、二人ともに小6のときと変化がない。この理由について考えると、「作業」の項目における、低年齢段階での設問は危険が伴わない活動についてのものがほとんどである。これに対し、高年齢段階での設問は「ナイフなどの刃物を注意して扱う」「ガスや電気コンロなどを使ってお湯がわかせる」など危険を伴うものが多くなっている。そのため、それらの作業を経験することが少なく、中学生になっても結果に変化がみられなかったと考えられる。危険を伴わない「作業」の能力については小学部段階である程度身につけていることが考えられる。(辻利率)

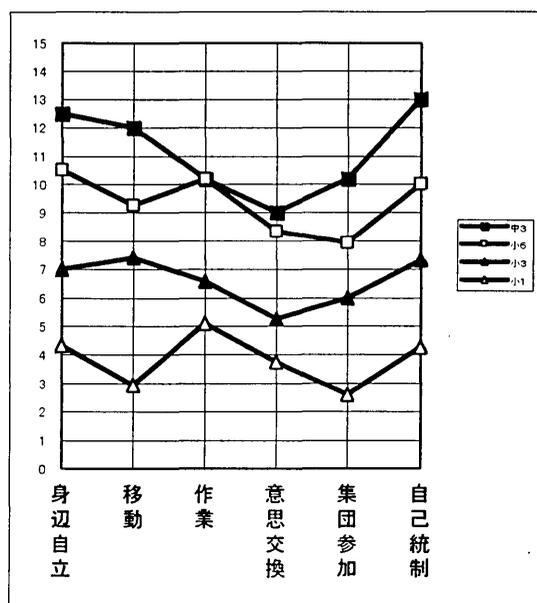


図-3 S-M社会生活能力検査の変容 中3男子生徒(自閉症)

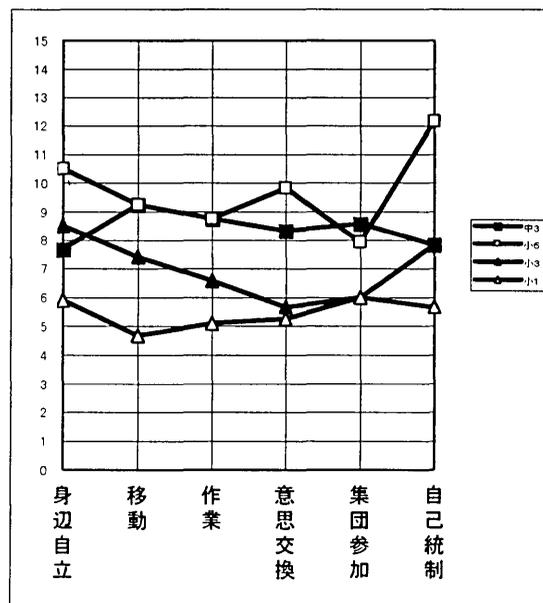


図-4 S-M社会生活能力検査の変容 中3女子生徒(ダウン症)

③ 身体発育調査から

表－1は、平成13年度に本校中学部に在籍していた生徒20名（男子11名、女子9名）について、身長と体重の変化について調べたものである。男女別の平均値と、症例別の違いをみるためダウン症とそれ以外に分けた平均値を出し、13年4月時と14年1月時（体重は2月）を比較して増加率を求めた。

表－1 平成13年度 中学部在籍生徒の身長体重の変化について

身長 (cm)				体重 (kg)			
	13年4月平均	14年1月平均	増加率 (%)		13年4月平均	14年2月平均	増加率 (%)
本校男子	154.5	158.9	2.8	本校男子	46.9	49.4	5.3
ダウン症	148.2	151.8	2.4	ダウン症	42.4	45.7	7.7
その他	156.6	161.5	2.9	その他	48.6	50.8	4.5
長崎県男子14歳	160.1	165.3	3.2	長崎県男子14歳	50.0	54.6	9.2
本校女子	141.9	144.7	1.9	本校女子	41.2	43.2	4.8
ダウン症	140.3	142.5	1.5	ダウン症	42.3	43.7	3.3
その他	144.9	148.9	2.7	その他	39.0	42.3	8.4
長崎県女子14歳	155.0	156.4	0.9	長崎県女子14歳	48.5	50.6	4.3

* 長崎県の増加率については、13歳と14歳の平均値の比較から求めた。

身長についてみると、男子については、平成14年1月時において、県の14歳平均の身長と同じくらいの生徒は2名いるが、全体的に低い傾向にある。特にダウン症の生徒では著しい。女子も同様である。体重についても、男女とも身長と同様のことがいえる。ここで、ダウン症と他の症例の生徒を比較してみると、ダウン症の生徒は身長が低くて体重が重いという、いわゆる小太りの像が浮かんでくる。増加率の面からみると、男子のダウン症児は身長の増加率は低いものの体重の増加率は高い。女子については、肥満傾向のダウン症生徒が食生活の改善などに取り組んで体重減になったことから、増加率としては高く出ていないが、その他のダウン症の生徒では5～6%と高い増加率をみせている。

小学部から高等部まで縦断的に成長の様子をみてみると、小学部の5・6年生から身長、体重とも大きく増加していることがわかった。中学部で増加のピークを迎え、高等部では、ほとんど身長の伸びはみられていない。体重については、運動不足などから増加している生徒がみられる。

次の表－2は、現在本校に在籍している女子の初潮年齢を示したものである。

表－2 初潮時の年齢と人数

初潮時の年齢	9歳～9歳11か月	10歳～10歳11か月	11歳～11歳11か月	12歳～12歳11か月	13歳～13歳11か月
人数	1人	2人	7人	5人	1人

このことから、小学6年生から中学1年生にかけて初潮を迎えたものが多く、初潮時の身長と体重は、身長が140cm前後、体重が40kg前後の発育状況であったことがわかった。

男子の精通現象については、保護者にアンケートをとったところ、気づかない保護者も多かったが、小学5年生から高校生までの間にみられたという結果が得られた。

以上のことから、本校中学部の生徒の発育についてまとめてみると、平均値は低い、健常児と変わらない成長曲線をたどっているといえる。よって、中学部での成長が大きく、二次性徴が現れて身体面で大人に近づきつつあるこの時期に「からだの学習」を行う必要性が確認された。特に女子については、初潮年齢から考えて、小学部の高学年から中学部において、月経に関する指導の必要性が改めて確認された。

(松下幸美)

(2) 思春期における発達のとらえ

中学生という時期は、体の成長がピークを迎え、二次性徴も次第に出現し、大人になっていく身体を一人ひとりが実感している時期である(前項③)。そして、知的障害のために、一人ひとりの MA は様々な幅が見られる(前項①)。しかし、障害や発達によって若干の違いはあるが、「中学生になった。一人でいたい。自分でいたい。」という気持ちがどの生徒も膨らみ、親からの心理的自立を図るようになる。また、この時期は、知的好奇心の高まりも感じられ、その高まりが、社会的に自立し、社会的な行動を維持する力へ影響を与える。このように、様々な力が相互に作用しながら成長を支えていると考える。これら相互の関連性については、大塚厚子(2002)が「思春期の心の指導内容」(“だれにでもできる性教育”より)でも述べており、その一つひとつの力は、障害が有る無しにかかわらず、思春期に大切に育てたい力であることがわかる。

ここで思春期に訪れる内面の変化について考えてみる。生徒たちは、自分と他者との違いを感じるようになり、他者の意図を感じつつそれに従って行動できるようになっていく。それに伴い、他者の意図や要求を理解しながら自分の意図や要求を調整する力が高まり、対人関係性、自己同一性、自我といったものが次第に確立してくる時期と考える。このように、他者との関係において自分というものが意味をもってくようになり、他者との間で人間関係を結びながら、また他者と調整しながら自分自身を確立していくようになると考える。

以上のような営みは、生徒一人ひとりによって違うものである。このとき、画一的な視点で教師である大人が評価してはいけないうし、他者の意図を押しつけるだけでは自我が膨らむことはない。しかし、反対に、生徒のありのままの姿を全面受容するだけでは自我が育つことにはつながらない。他者のモデルを自分の世界に取り入れ、試行錯誤しながらも自分の世界をつくりあげていくことが大切なことである。前項②のグラフからも分かるように、二事例ではあるが、社会生活能力の6領域における変容の違いが読み取れた。これは、先にも触れたように、障害の程度や個人差と考えられ、対人関係性の確立、自己同一性の確立、自我の確立の過程における違いが現れていると考える。このことから、個に応じることの必要性がわかる。よって、個に応じた課題に、試行錯誤し、自らが外界に働きかける喜びを感じ、本当に手応えを感じながら達成感を得ることが、対人関係性の確立、自己同一性の確立、自我の確立につながるかと考える。

さて、小・中・高等部一貫教育において、中学部の時期を「基盤づくり」の時期ととらえている。研究その1では、「どうして基盤づくりといわれるのか?」と考えたとき、「様々な可能性を秘めた時期である。その一人ひとりの蕾を大切に育てることが大事なことである。」ととらえ、図-5に示す「厳選の視点(基礎・基本となる力)」を基盤につながる力とした。そこでとらえた「どのような内容を学ぶのか」の力は、中学部が考える「5つの基盤」につながる力であり、「どのような学び方をするのか」の力は、対人関係性、自己同一性、自我の確立につながる力であるかと考える。一つひとつの基盤と「厳選の視点」のつながりについては研究の余地がある。しかし、これまでの教育課程を見直し導き出された「厳選の視点」は、知的好奇心の高まり、親からの心理的自立、社会的な自立、社会的行動を維持する力といった思春期に大切に育てたい力につながることは明らかであるかと考える。今後の研究で、思春期の発達と「5つの基盤」および「厳選の視点(基礎・基本となる力)」のつながりをさらに深めていきたい。(高谷有美)

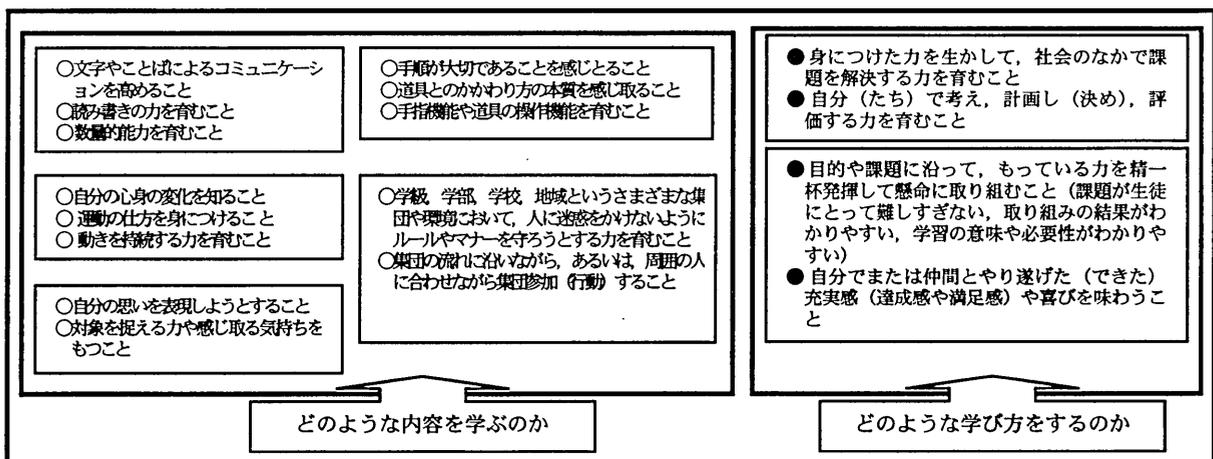


図-5 厳選の視点(基礎・基本となる力) ※研究その1より

(3) からだの学習（性教育）に関するアンケート調査から

① 進路先（入所・通所施設）へのアンケート調査

ア 調査実施の概要

表－3 調査実施の概要

調査対象	本校卒業生が利用している主な施設 19 か所の代表職員 (回収率 89%, 1 か所の施設は作業グループごとに回答)
調査領域	身辺自立（トイレ, 入浴), 性別の認識, 生理への対処, 仲間関係, 異性への興味関心, 身だしなみ, 性行動, その他
調査方法	調査領域の各質問に対して, 代表の施設職員に次のなかから回答してもらった ◎: 重要な課題である (必ず身につけて欲しい) ○: 課題である (できれば身につけておいて欲しい) △: それほど気にならない課題 (特に困らない)
調査期間	平成 14 年 11 月 26 日～12 月 6 日

イ 調査結果

調査領域の各質問において, ◎重要な課題である, ○課題である, との回答をあわせると 90%以上となった質問がほとんどを占めた。そのなかで, ◎重要な課題である, の回答が多かった質問から順に示す。

表－4 「重要な課題である」の回答が多かった質問

90%以上	「場所や周囲の状況をわきまえずにマスターベーションをする」「知らない人に誘われても断らずについていく」「避妊の仕方を知らずに性交をしている」
80%～90%	「場所や周囲の状況をわきまえず性交をしている」「性的関係を強要されても断ることができない」「プライベートゾーンを異性の前で恥ずかしがらずに見せてしまう」「自分が男か女か良く認識できていない」
80%～70%	「女性が小用後にトイレトペーパーで拭かない」「生理用品をすぐにはずしてしまう」「相手や周囲に不快感を与えるようなかわり方をする」「性器いじりをする」「場所や周囲の状況をわきまえずに性に関する雑誌や本を見る」

ウ 考察

施設においては, 相手に迷惑をかけたり, 性的被害者, 性的加害者へとつながったりする行動は「重要な課題である」と考えていることがわかる。つまり, 「非社会的」「反社会的行動」と考えられる行動に対しては重要な課題としてとらえ, 「ぜひ身につけて欲しい」と考えているといえる。

このような結果は, 思春期にある中学生にとって, 性の衝動が芽ばえる時期に「非社会的行動」「反社会的行動」につながる内容は指導の必要性が高くなり, このような内容は施設側からのニーズ (将来の生活からのニーズ) としても高いととらえることができる。ここで将来のニーズに応じた内容「知らない人に誘われても断らずについていく」について具体的に考えてみたい。

「知らない人に誘われても断らずについていく」という行動をとらないための内容は「知らない人と知っている人に対する接し方を理解する」「知らない人に誘われたときの断り方を身につける」などの内容を授業などで指導することが考えられる。しかし生徒によっては, 知らない人と知っている人を判断する力が十分身につけていなかったり, 誘われたときに言葉などの表現で断る力が十分でなかったりすることが考えられる。他者からの働きかけを受け入れることや自分から人に働きかけることを目標としている生徒にとっては, これらの内容を学習することは混乱を招くかもしれない。

「知らない人に誘われてもついていかないようになる」という目標はおそらくすべての生徒に求めたい目標である。しかし, 自分の所在を知らせる機器を携帯することができるようになるという将来の生活の考え方の違いによって将来のニーズに応じた内容が変わってくることも考えられる。

このようなことを考えると, 将来のニーズという視点と発達のニーズの視点の双方からその生徒にとってどのような内容が必要かを考えることが重要になってくると考える。その結果に基づいて内容の選択・組織などが柔軟に対応できる教育課程の在り方を考えなければならない。 (川波 寿雄)

② 学校関係へのアンケート調査

ア 調査実施の概要

表—5 調査実施の概要

調査対象	国立大学附属養護学校教諭（知的障害）42校，長崎県立知的障害養護学校教諭8校
調査領域	各校における性教育の指導の実際，教育課程上の位置づけ，指導内容について
調査方法	性教育の指導に関するアンケートを郵送し，回収（回収率82%）
調査期間	平成14年11月26日～12月6日

イ 調査結果

表—6 各校へのアンケートの回答結果

		小	中	高			小	中	高
	学校数	41	40	37		性被害	4(10%)	23(58%)	21(57%)
	性教育の必要性を感じる	38(93%)	39(98%)	37(100%)		赤ちゃん誕生	4(10%)	7(18%)	17(46%)
指導	教育活動全般	36(88%)	32(80%)	28(76%)	具体的内容	異性との関わり	11(27%)	26(65%)	33(89%)
	授業として実施	9(22%)	16(40%)	22(59%)		月経について	18(44%)	23(58%)	15(41%)
具体的内容	男女の違い	24(59%)	31(78%)	35(95%)		マスターベーション	2(5%)	14(35%)	16(43%)
	大人と子どもの違い	13(32%)	21(53%)	27(73%)		性器の仕組みと働き	1(2%)	7(18%)	12(32%)
	トイレの使い方	33(80%)	32(80%)	22(59%)		性交について	0(0%)	1(3%)	12(32%)
	入浴について	26(63%)	25(63%)	35(95%)		結婚について	0(0%)	1(3%)	15(41%)
	清潔(手洗い)	35(85%)	33(83%)	30(81%)		その他	1(2%)	3(8%)	3(8%)

ウ 考察

表—6 から、「性教育の必要性」については，小・中・高等部のどの部においても「必要性を感じる」という回答が90%を越えており，そのニーズの高さがうかがえる。実際の指導については，学校生活全般で，日常生活の指導として行っているところが多く，特に小学部で高い割合を示している。

性教育で，各校が実施している内容としてみると，「清潔（手洗い・うがい）」については，どの部においても80%を越える高い割合で指導が行われている。「トイレの使い方」についても同様であり，高等部のトイレ指導においても，個別に指導の必要な生徒に対応したり，社会自立に向けて必要なマナー面での指導が加わるなど継続的に指導がなされていると考えられる。

「性被害」「月経」については，中学部での実施率が一番高い。「異性との関わり」や「マスターベーション」の実施率も中学部から急激に高まっている。このように各部の実施率を比較してみると，心身の成長が最も顕著な中学部段階に指導を開始し，その後高等部においても継続して指導している学校が多いと考えられる。二次性徴に伴って現れてくる様々な行動上の問題に対し，具体的に指導を開始することが一番必要だと考えられているのは，中学部段階だと考えられる。

その他の内容についても，実施率に若干の違いはあるものの，同様の傾向がみられる。このことから，中学部の段階から性教育を実施する必要性が最も高く，高等部においてさらに，その必要性が高まると考えられる。これらのことから，本校でも，中学部と高等部が今後十分連携を図り，さらに効果的な指導を行っていくことが必要であると考えられる。

「性交」「結婚」「性器の仕組みと働き」等の内容については，中学部でもその実施率が10%以下であり，高等部においても，50%を割っている。「どのように取り扱ってよいかわからない」とか「取り扱うべきか判断しかねる」など，今後検討の必要な領域である。本校中学部でも「結婚」や「性交」については，まだ授業のなかで扱っていないが，今後生徒の実態や保護者，社会のニーズに応じて高等部との連携も含め，取り扱いを検討することが必要な内容であると考えられる。（川尻暁子）

③ 在校生保護者へのアンケート調査

本校に在籍する児童生徒の保護者に対し「からだの学習」に関連したアンケート調査を行った（対象人数 63 名，回収率：93%）。アンケート調査用紙は「児童・生徒の性」（学校図書 1999）で取り上げられた内容に準じて作成した。その内容は基本的な身近自立，性の認識，月経・精通・性器発毛の時期，仲間との遊び，異性への関心，オシヤレ，性器いじり，マスターベーション，性に関する雑誌等への関心，性知識，エイズ，性被害等からなる。

本アンケート調査結果から，身体面での二次性徴の出現は個々の児童生徒の障害にかかわらず小学部の高学年から中学生の時期であることが明らかになった。そのなかの一つである性器発毛の時期は図-6のとおりである。

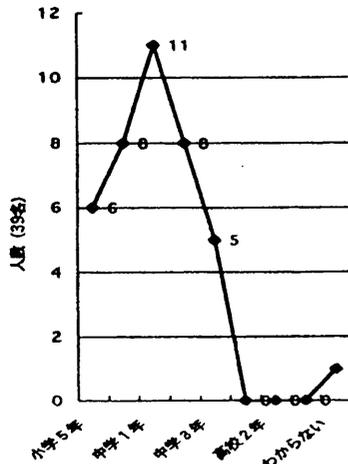


図-6 性器発毛の時期

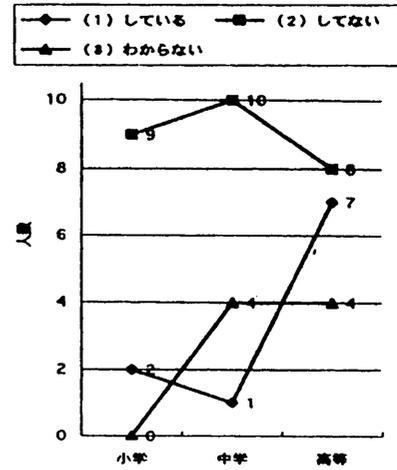


図-7 マスターベーションの状況

性への興味については全体の77%の児童生徒が「興味関心がない」という回答であった。それは中・高等部の生徒においても高い比率であり，そのような結果は知的障害をもつ児童生徒の保護者であるがゆえの願いからであるのか，事実がそうであるのかなどは，より詳細に検討する必要があると思われる。それ以外のデータからは，小学5年ごろから徐々に性に対して興味をもつ傾向がみられた。

マスターベーションを行っている生徒は中学部段階まではあまりみられないが，高等部段階になると割合多くみられる傾向がある（図-7）。そのなかでほとんどの生徒が場所や周囲をわきまえてマスターベーションを行っており（図-8），そのことは本校のこれまでの「からだの学習」の指導の成果が関与していると考えられる。しかし，マスターベーションは，どの生徒においても場所や周囲をわきまえて行うことが原則であり，たとえ少数者であっても場所や周囲をわきまえない生徒がいることに注目し，その内容を詳細に検討する必要があると思われる。

本アンケート調査において，多くの保護者が児童生徒の性被害に対して危機意識をもち不安を抱いていることが明らかになった（図-9）。一人ひとりの児童生徒が様々な状況や場面に応じて，自らの身体を守るという最も危機的状況に対して，児童生徒自らが判断し行動するという主体性の具体的な行動のありようを培うことが期待されていると思われる。

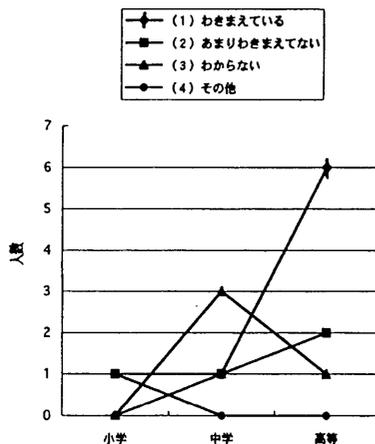


図-8 場所や周囲をわきまえたマスターベーションの状況

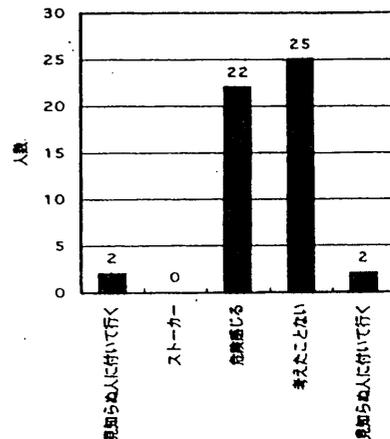


図-9 性被害への危機意識

以上のことから、知的障害の児童生徒は、その程度や症因の違いに関係なく二次性徴など身体的変化の時期が健常の児童生徒とおおよそ変わらないが、一方において個々の知的発達などの違いによる著しい内面の個人差があると推量され、その結果、現象としての児童生徒のありようが多様であることが理解された。そのようななかで、児童生徒自らが「からだ」の変化や状況を知り、自らの「からだ」をよりよくし、維持するという主体性のありようは、個々の児童生徒に応じて多様に存在すると考えられる。そこで、それらを培うための個々の児童生徒のニーズに応じた教育のありようも多面的な視座から探る必要があることが示唆された。

(岡元和正)

④ 卒業生へのアンケート調査

高等部が行った本校の卒業生に対するアンケートに、「からだの学習」に関連した項目を追加して調査を行った（男子 71 名，女子 43 名，計 114 名の回収，回収率約 44%）。それぞれの項目で未記入が多かったが、自分なりに質問の意味がわかり、回答できる項目には回答していると考えられる。

本人が二次性徴に気づくのは小6から高3までの間であり、小6で15%（今後の%は未記入を含まない数字とする）、中学部段階では、58%の人が気づいている（図-10）。また、どうして変化に気づいたかの質問には、「ひげ（76%）」、「声変わり（44%）」、「精通（18%）」と答えている。二次性徴は避けて通れない自分の体の問題であり、本人が体の変化に気づき始める小学部高学年の時期から指導をはじめ、中学部の時期に指導をしっかりと行う必要があると考える。

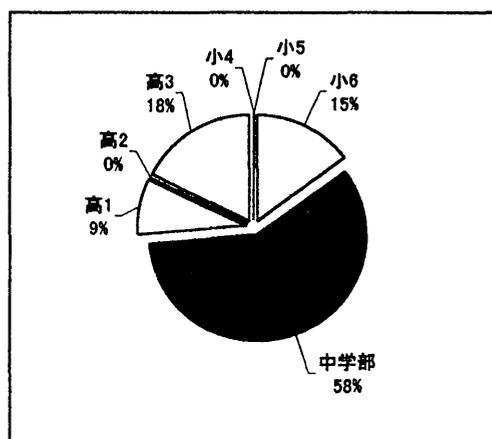


図-10 二次性徴に気づいた時期

性教育で重要な内容として、「男女の違い」（71%）がもっとも重要であると考えられている。その他、

「大人と子どもの違い」（38%）、「入浴」、「清潔（手洗いうがい）」（29%）、「赤ちゃん誕生」（24%）、「結婚」（20%）、「異性とのかかわり」、「トイレ」、「マスターベーション」、「性器の仕組みと働き」（18%）については、重要であると考えている人もいることがわかる。生徒の実態に応じてどのような内容が重要なのかを考えていくことが大切である。

114 名中5名が知らない人に体を触られたり、触られそうになったりしたことがあると回答している。この5名という数字から考えても、性被害についての指導を行うことは必要であると考えられる。しかし、知的障害のある生徒においては、相手が知らない人であるという状況判断をすることや断わるなど相手に自分の気持ちを伝えることが苦手な生徒が多いので、この生徒にはどこまでをねらうのかという内容を考えて、指導の仕方についても工夫したりすることが必要であると考えられる。

(伊東功)

(4) 総括的考察

① ニーズについて

田中ビネー知能検査，S-M社会生活能力検査，身体発育調査の結果からは，中学部に在籍した生徒の発達をとらえたり，中学部の教育課程で学んだ生徒の発達を縦断的に把握したりすることができた。これらの結果は，生徒が「どのような内容を学習する必要があるのか」「それらを学ぶ準備ができてきているのか」について，教師の主観ではなく客観的な資料をもとに把握することになった。身体発育調査の結果から「月経の学習が小学部高学年から必要とされる」ことが示唆され，発達のニーズの視点から必要な内容を検討する機会を得た。このことは他部への提言にもつながると考える。今後は，さらに多面的に生徒の発達をとらえるため，たとえば心理的発達をとらえるなどをおして，本校中学部の発達を考える視点を模索する必要がある。そして，研究その1での成果と照らし合わせ，部教育目標，5つの基盤の見直しへとつなげていきたい。

性教育に関するアンケート調査からは，将来の生活の場からのニーズ，他学校のニーズのとらえ，保護者からのニーズのとらえ，実際に卒業した生徒からのニーズについて客観的にこれらを把握することになった。これらは，将来の生活からのニーズを把握することにつながったと考える。今回は，各アンケートにおいて特徴的な一部のデータをもとに考察しているため，他のデータについても今後考察する必要がある。

性教育に関する将来の生活からのニーズはアンケート調査研究から明らかになってきた。今後さらに思春期の発達のニーズを明らかにしていきたい。

② 教育課程改善の手がかり

現行の教育課程で学んできた生徒の変容は指導記録などを見れば明らかである。どの生徒も一つひとつの内容が身につけてきていることがわかる。しかし，他の内容を学習した方がよいと考えられる生徒が在籍することも考えられ，それらの内容が生徒個々のニーズに応じた内容なのか，発達のニーズと将来の生活からのニーズから果たしてそいえるのかを十分検討する必要がある。言うまでもなく生徒一人ひとりのニーズを把握し，必要な教育的支援を行うという考え方の転換は，「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」においても述べられているところである。生徒一人ひとりのニーズを把握し必要な教育的支援を行うという考え方の転換は，集団学習から個別または小集団学習への安易な転換ということではないと考える。生徒が集団のなかで学ぶことによる効果は今までの指導法の研究，内面の研究からもいえることである。

先ほども述べたように，現行の教育課程で学んできた生徒の教育効果は明らかにある。現行の教育課程のよさは何なのか，今までの教育課程の評価についても私たちは十分検討しなければならない。性教育について，将来のニーズという視点と発達のニーズの視点の双方から考え，生徒一人ひとりにとって，どのような内容が必要かを考えること，その結果にもとづいて内容の選択・組織，指導計画の在り方の検討していきたい。そして，他の指導形態への応用を考えることをとおして教育課程改善の手がかりを探りたいと考える。（川波 寿雄）

5. 今後の研究計画

生徒一人ひとりのニーズの把握の在り方と柔軟に対応できる教育課程の創造を探るため次のことに取り組む。

- 心理的発達をとらえる研究を行う。
- 思春期の発達と5つの基盤および「厳選の視点（基礎・基本となる力）」のつながりをさらに深める。
- アンケート調査について，今回は各アンケートにおいて特徴的な一部のデータをもとに考察しているため，他のデータについての考察を行う。
- 完全学校週5日制や総合的な学習の時間の確保などから，各指導形態の指導時数が減少しているため，単元から指導形態までの見直しなど現教育課程の評価を行う。（辻 利率）

IV 高等部の研究

(高等部研究テーマ)

自ら進路を切り拓く生徒を育てる「進路学習」の在り方の検討をとおして、

教育課程再編成の手がかりを探る

～卒業生の実態調査と高等部段階における個々の発達をふまえて～

1. 高等部研究テーマについて

私たちは、生徒たちの自立と社会参加をめざして、日々実践を積み重ねている。特に、青年期後期の発達段階にある高等部の生徒たちには、自己を意識し自分と向かい合い、自分の内面に目を向けながら生き方・在り方を考え、主体的に進路を選択・決定して欲しいと強く願っている。なぜならば、このプロセスを経ることが、社会生活に主体的に参加するための人格的基盤を培うことにつながる(内海, 2000) と考えるからである。私たちはこのような主体的に進路選択に取り組む生徒を「自ら進路を切り拓く生徒」と考え、具体的に次のように定義した。

「自ら進路を切り拓く生徒」とは、「学校生活・家庭生活・地域生活などで身につけた力を基礎として、自分のことを理解し、卒業後の進路を自分の生き方として考え、進路先を自分で選び、決めたことに向かって努力している生徒」である。

ところで、現在、高等部における進路指導は、「生徒の体験を重視した進路先見学や現場実習」を中心として、「進路や将来の生活などを考える学習」「進路相談」の三つで構成している。私たちは、これまでも生徒の主体的な進路選択を重視して実践を重ね多くの卒業生を送り出し、一定の成果をあげてきたと考える。しかし、研究その1を終え、本校教育課程の課題について討議するなかで進路指導に関して次のような課題があげられた。

- | |
|--|
| <p>① 進路指導の理念、すなわち進路指導の基本的な考え方・めざす生徒像・目的・方針などは、教師間の共通理解はあるが明文化されていない。また、時代に応じて進路指導の考え方などを、その都度修正してきたが、現在の生徒の実態や発達段階、卒業後の生活、社会情勢の変化などに応じたものになっているか検討を行う必要がある。</p> <p>② 「進路や将来の生活などを考える学習」は、「進路学習」といわれる(藤田, 2000)が、本校においてもその内容を重視して指導を行っている。しかし、それらの指導内容・指導計画が体系的に組織されていない。</p> |
|--|

これらについて検討を行うなかで、①については、「進路は教育の総和」といわれるように、進路先の選択・決定は、それまでの全教育活動の積み上げの成果であるといえるものである。そのため、自らが進路を選択し、決定するための進路指導の理念を検討することは、高等部教育のみならず学校教育目標、めざす人間像といった本校教育の理念を構築することにつながると考えられた。また、②を検討することで、総合的な学習の時間と進路学習との関係、また、進路学習で扱う内容をどの指導形態に位置づけるかなど、高等部教育課程を整理・統合するうえで有用な提言が得られると考えた。以上のことから、高等部では、部の教育課程のみならず全校の教育課程再編成に向けて有用な提言が得られる進路指導、そのなかでも「進路情報を含む社会的認識や自己意識に関する学習」として、進路指導の中核である進路学習に焦点を当てて研究を進めていきたいと考えた。

私たちは、進路学習の在り方を検討するにあたり、まず、進路学習の根幹となるべき進路指導の理念を構築したいと考えた。そして、進路指導の理念を構築するにあたっては、先行研究に学ぶことに

加え、発達の視点・卒業後の生活の視点という、二つの視点を重視して進路指導の理念を構築していきたいと考えた。そして進路指導の理念を構築するなかから、高等部教育のめざす生徒像、さらに本校教育課程でめざす人間像、学校教育目標などについて提言を行い、本校教育の理念を構築していくこととした。次の段階として、進路学習の在り方を検討するが、その際、特に、生徒が自らの進路を選択・決定するにあたり必要な発達の基盤について検討を行い、個の発達段階に応じた進路学習の在り方を模索していこうと考えた。

なお、本紀要では、今年度、高等部研究として実施した進路指導の理念の構築、個々の発達に必要なかつ適切な進路学習の在り方、進路学習の年間指導計画の部分を中心に報告する。 (山田勝大)

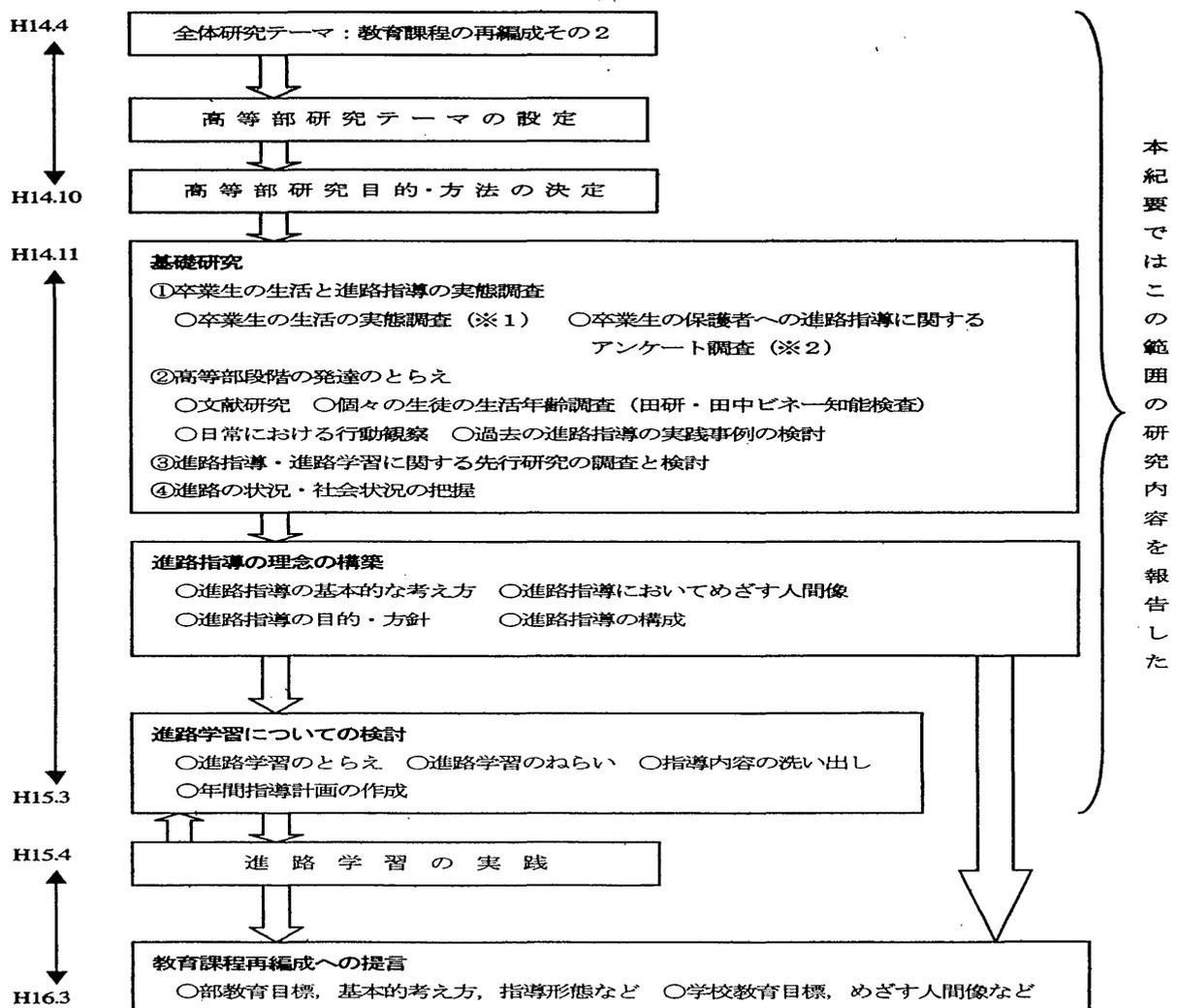
2. 研究目的

卒業生の生活の実態調査と過去の進路指導の実態調査、高等部段階における個々の発達をふまえ、自ら進路を切り拓く生徒を育てる「進路学習」の在り方を検討する。

このことをとおして、高等部教育課程再編成につながる提言を行うとともに、学校教育目標やめざす人間像など本校教育課程再編成につながる提言を行うことを高等部研究の目的とする。

(吉井麻弥)

3. 研究内容与方法



※1：くらし、しごとなど、7項目について、卒業生262名に調査用紙を郵送し回答を求めた。

※2：卒業生の保護者251名に対して進路指導についてなど、3項目について調査用紙を郵送し回答を求めた。 (吉井麻弥)

4. 研究の経過

(1) 進路指導の理念

私たちは、進路指導の理念を構築するにあたり、卒業生の生活の様子とその保護者の考え方、高等部段階の生徒の発達、先行研究における進路指導および進路学習の考え方、近年の進路状況などから重要な示唆が得られると考えた。以下、それぞれについて述べる。

① 卒業生の生活と進路指導の実態調査

卒業生の「生活の実態調査」の回収率は52.3%、卒業生保護者に対する「本校進路指導に関するアンケート調査」の回収率は47.4%であった。ここでは、卒業生の実態調査と卒業生保護者へのアンケート調査の結果から、進路指導の理念に結びつく要素となるものについて考察する。

ア 卒業生の生活の実態調査から

a 自分で進路先を選ぶことの大切さについて

転職についての質問に回答があった人のなかでは、半数近くが進路先を変っていた。しかし、現在の進路先における「満足度」については、9割以上が「満足」か「まあまあ満足」と答えている。転職をしても最終的には自分で満足できる進路先を見つけているといえる。卒業時点だけでなく卒業後も訪れる転職機においても、進路を主体的に選択・決定できる力を育てておくことが大切である。

次に、本人が「満足」しており、保護者も「希望通りになった」と答えた人は、「転職していない」と答える割合が高い。自分で選択した進路先では、本人の「満足度」や進路先での「定着率」も高いといえる。このことから、様々な選択場面において、自分で決めて選ぶという経験を積み重ねることが、最終的に自分の進路先を決定し、安定して働き続けられる力につながっていくと考えられる。

b 前向きな視点で選択することの大切さについて

仕事を選ぶときの理由については、「作業内容」や「職場の雰囲気」と答えた人は「転職していない」割合が高いのに対し、「転職回数1回」の人の40%は「家の人が勧めた」からと答えている。毎日働く場を決定するためには、しっかりと自分の目で確かめて決定することの大切さがうかがえる。また、本人が少し努力することで、「できた」という作業そのものに対する満足感を感じられることも仕事を続けていくうえでは大切であろう。つまり、単に好き嫌いや、現在の自分にできる・できないという観点だけでなく、自分の力を知りつつ、「もう少し頑張ってみよう」という、より前向きで高次の視点で選択する姿勢を育てることも必要と思われる。

c 卒業後も支援をすることの大切さについて

「職場で受けた注意」の内容は、どのような職場においても技能面と態度面が多く、次いで人間関係であった。技能面に関しては、経験を積むことによって向上が期待できるが、態度面や人間関係に関しては、なかなか改善が難しい。在学中の指導法や留意する事などを進路先や関係機関に情報として提供し、本人に合った働きかけを周りが行うことによって、社会人として成長し続けられるように、ネットワークをつくり一体となって支援していく必要があると考える。

d 生活する場や生活技能の向上の大切さについて

現在の「生活の場」は、84%が「自宅」である。また、「本当に住みたい所」についても、やはり、自宅が最も多い。その反面、数は少ないものの「グループホーム」で生活している人は、「グループホームに住みたい」と答えている。在学中に、家庭を離れて自立的な生活することも楽しいという経験をしておくことも、将来的にみると大変重要なことと考えられる。 (森川 元)

イ 卒業生の保護者への本校進路指導に関するアンケート調査から

a 意思表示能力の向上と意思の読み取りの大切さについて

ほとんどの保護者は、進路は本人が自ら選択し、決定することが望ましいと答えている。このことは、進路を自ら選択し決定することの大切さの確かな裏付けになると考える。

比較的重度の卒業生の保護者については、進路は本人が自ら選択し決定することが望ましいと考えているものの、現実の問題として「本人の意思がわかりにくい」という回答が多くあった。このことから保護者の苦悩が伝わってくるようで、今後、重度の生徒たちやその保護者の切実な思いを、私たちがいかにとらえるかが、大きな課題でもあると考える。

そのためには、在学中に本人の意思をきちんと表現できるようなコミュニケーションの方法、たとえば、文字カードや写真などを用いて意思表示をするなどの方法も身につけさせておく必要がある。同時に、私たち教師や保護者が、本人の意思表示をしっかりと受け止め、見逃さない姿勢を常にもつべきであろう。

b 本人や保護者の思いをしっかりと受け止めることの大切さについて

学校の進路指導で良かったことでは、本人の適性をしっかりとつかみ、その適性に応じた実習先を探して、実習をさせてもらったことがあげられていた。また、学校側は熱心に保護者の意見を聞いてくれたし、熱心に進路先を探してくれたなど、保護者に対する学校側の対応の仕方に良い評価を得ているようである。今後も進路相談などでは、じっくりと時間をかけ本人や保護者の話に耳を傾ける姿勢が大切であると考えられる。

c 進路情報の必要性について

進路に対しての情報が足りなかったという意見があった。具体的には、ことあるごとの進路情報の提示、進路についての関係機関を利用する仕方の情報が足りなかったということである。なかには、保護者自身の進路に関する関心の薄さや、進路に対する情報収集の不足など、保護者自身の努力が足りなかったことをあげる人も多かった。

進路情報を得るために努力し、その結果として良かったこととしては、保護者が進路先を訪問し、そこから生の情報を得たこと、実際に体験した先輩の卒業生の保護者に情報を尋ねる機会をもったことという回答があった。いずれにしろ、保護者の進路先見学や先輩保護者との情報交換の機会をもつように促すなど、進路情報の提供が必要であろう。同時に、学校においても進路指導の状況のお知らせや進路学習などの授業参観の実施なども今後大切になるであろう。

d 保護者の進路に対する啓発の大切さについて

保護者自身が自分の子どもの進路に対して関心が薄かった、進路に関する情報を収集する努力が足りなかった、学校だけに頼り過ぎていたなどの謙虚な意見もあった。しかし、これは保護者ばかりの責任ではなく、私たち教師も保護者に対して進路に関する啓発が足りなかったことを素直に反省すべきであろう。学校での進路指導の状況を随時知らせる、授業参観を勧める、進路情報を提供する機会を増やす、保護者へしっかりと伝わるように紙面で示すなど具体的な保護者への啓発が大切であろう。特に、父親に知らせる方法を考えることも課題となる。

e 進路先見学や現場実習の必要性について

学校が行っている進路指導で役に立ったこととして、進路先見学や現場実習をあげる人がほとんどであった。さらに増やして欲しいという意見もいくつかあり、学校に努力して欲しいことでも、進路先となる職場の見学やそこでの実習という意見があった。このことは、実際に実習を体験させることが、本人の意思を確かめる上で一番大切であり、そのためにも本人や保護者が希望するところには在学中に必ず実習を経験させることが必要であるということである。それらの実習をとおして、本人の適性を見極めることにもつながるであろう。

(井手純郎)

② 高等部段階にある生徒たちの発達

ア 青年期後期の発達課題

青年期は第二次性徴に伴い、心と身体に様々な混乱や葛藤を抱える時期である（高木，1999）。知的障害がある生徒たちも青年期後期になると不安定であった心に落ち着きを見せるようになり（任海，2000），さらに，特徴的な発達として，青年らしいふるまいをし，独立した個人としての対応を周囲の個人に要求するようになる。そして，大人になっていく身体と，まだ大人になりきれない心，そして，大人として認められない社会関係のなかで生じる混乱や葛藤を経験していく過程で，「自分とは何か」「自分のめざす道は何か」「自分の存在意義は何か」といった懐疑が生じ，「これまでの自分」「現在の自分」「あるべき将来への自己像」がどう調和すべきかについて，内面的な同一性と連続性を求めて苦悩するようになる。そして，この苦悩を克服することによって青年は大人になる。つまり，自分の過去を総括して前に進む，新しい自分づくりを始めていくことが求められる。いわゆる「自分こわし自分づくり」である（内海，2000）。

ここで本校の在校生や卒業生についてみると，この「自分こわし自分づくり」の時期に現場実習などの体験をとおして今までの自分を振り返り，新たな目標をもって生活を送ろうとするなど，「言い知れぬ大人らしさ」を感じられるようになった生徒が多い。そこで，今までの自分を振り返って大人へ向けての自分を確立する「自分こわし自分づくり」を高等部段階における教育の柱と考え，本校でも大切にしていきたいと考えた。

イ 進路の選択・決定に必要な発達について

自己を客観視し，自己の能力・適性に応じた進路の選択が可能となるのは，5・6歳の発達段階であると考えた。白石（2000）らは5・6歳の発達段階で「だんだんと大きくなる」といった系統的理解が進むからこそ，自己認識においても『だんだんと変化してきた自分』『葛藤を乗り越えて変わってきた自分』に手応えを感じ，『もっとこんな自分になりたい』と未来への思いをふくらませることが可能となる」と述べている。それらのことをもとに私たちは，5・6歳の発達段階で自己を客観視し，自己の能力・適性に応じた進路の選択が可能となると考えた。

しかし，本校の生徒の発達段階はおおよそ2～9歳である。文献的な基準で考えると，本校の進路学習は，5歳の発達段階に達していない生徒や，達していてもコミュニケーションなどの難しさから自己選択の意思表示が難しい生徒に対しては特別な配慮，または，発達段階に応じた指導が必要となってくるだろう。

③ 先行研究から本校に取り入れたい進路指導・進路学習についての考え

先行研究の調査と検討を行い，次のような概念がこれからの進路指導・進路学習に必要であると考えた。

- 作業学習のなかで扱われることが多かった現場実習については，自己概念の再構成される大切な活動ととらえ，単に技能的な向上をねらうのではなく，自分の人生のなかで働くことは何か，自分は何をしたいのかなどを再認識するための機会ととらえ，進路学習のなかに位置づける。（宮城教育大学附属養護学校，2000）
- 「障害児・者の社会参加をすすめる個別移行支援計画」（全国特殊学校長会，2002）で提案されている地域におけるネットワークの構築と個別移行支援計画の形式の検討と実践を進路指導の中に位置づける。
- 進路の情報を単に知るというだけでなく，自分の人生を見通すことで，生きていくこと，社会参加していくこと，自立していくことに向けた視野の広い学習と位置づける。（宇都宮大学教育学部附属養護学校，1999）

（今里順一）

④ 進路の状況・社会状況

平成4年前後の卒業生の企業就労と福祉的就労は半々であったが、その後、急激に福祉的就労(注参照)が伸び、現在は、大半の生徒が通所施設の利用を進路先として希望している。企業就労希望者は、一学年1～2名程度である。そのほとんどが知的障害者の職業訓練機関(長崎能力開発センター)を受験している。卒業後すぐに企業就労する者は少ない。

生徒の卒業時の進路は、福祉的就労希望者が大半を占める現状である。しかし、通所施設の定員は満杯状態が続いており、デイサービスの利用や日中受け入れ制度の利用をすることで、何とか日中活動の場を確保しているような状況である。小規模作業所においても、定員に空きがない状況である。企業就労に関しても非常に厳しい状況が続いている。

(注：福祉的就労は、通所更生施設、通所授産施設、小規模作業所、小規模通所授産施設、日中受け入れ制度利用、デイサービス利用などの日中活動の場を想定している。)

⑤ 進路指導の理念の構築

前述の①②③④から示唆されたことを整理し、簡潔に述べると以下のとおりである。

- 生徒自身による主体的な選択・決定の大切さ
 - 進路の選択・決定において発達段階を考慮することの大切さ
 - 自立生活に向けての生活技能や態度習得の大切さ
 - 本人の意思表示能力の向上と教師や保護者の意思の読み取りの大切さ
 - 本人や保護者の思い(親亡き後の不安など)をじっくり受け止めることの大切さ
 - 本人や保護者への進路情報の提供の大切さ
 - 本人や母親ばかりでなく、父親の進路への意識を高めることの大切さ
 - 親亡き後の生活など、一生のなかでの進路変更を見通した情報提供の大切さ
 - 実習経験を充実させることの大切さ
 - 進路先と連携した継続指導の大切さ
 - 進路先や福祉の動向などの情報収集、卒業生の動向の把握、卒業後の支援、進路先の開拓、進路先の創造、同窓会活動のサポートなどの大切さ
- これらをもとに、進路指導の理念を以下のように考えた。

ア 本校における進路指導の基本的な考え方

本校の進路指導は、それぞれの発達に応じた自立と、生き方を含む生徒の主体的な社会参加を支援する教育的営みであり、全教育活動をとおして行われるもので、以下の3点を支援するものである。

- 一人ひとりの発達に応じて、自分の気持ちを伝えようとする技能・態度、主体的に行動しようとする態度、いろいろな場面において自分自身で選択・決定しようとする態度を身につける。
- 社会生活を営むうえで必要な知識・理解・技能・態度を、一人ひとりの発達に応じて身につける。
- 上記で形成された力をもとに自分の生き方・在り方を考え、主体的に進路を選択し、決定した進路に向けて努力することをとおして、青年期後期の発達課題である「自分こわし自分づくり」を行う。

イ 進路指導におけるめざす生徒像

私たちは、生徒が主体的に自らの生き方・在り方を考え、進路を選択・決定する姿を「進路を自ら切り拓く生徒」ととらえ、その具体像を次のように設定した。

- 自分の気持ちを伝えようとする生徒、主体的に行動しようとする生徒、いろいろな場面において

自分自身で選択・決定しようとする生徒

- 社会生活を営むうえで必要な知識・理解・技能・態度をそれぞれの発達に応じて身につけている生徒
- 自分の生き方・在り方について悩んだり、卒業後の進路を選択・決定する過程をとおして、新たな自分づくりをする生徒
- 選択・決定した進路に向かって、課題を意識し克服するために、努力する生徒

ウ 進路指導の目的

- 自分の気持ちを伝え、主体的に行動し、自分自身で選択・決定する。
- 社会生活を営むうえで必要な知識・理解・技能・態度を、それぞれの発達に応じて身につける。
- 自分の生き方・在り方を主体的に考え、卒業後の進路を選択・決定する過程をとおして「自分こわし自分づくり」を行う。

エ 進路指導の方針

a 生徒への指導について

- 普段の学校生活のなかで主体的に活動することを大切にしながら自分で選択し決定する機会を設定する。
- コミュニケーション技能の向上と自分から思いを伝えようという気持ちを大切にする。
- 社会生活に必要な知識・理解・技能・態度を、全教育活動において指導する。
- 以下に留意しながら、適切かつ効果的な進路情報の提供を心がける。
 - ・ 卒業時点についての情報はもちろんのこと、親亡き後など、ライフステージを見通した進路情報を提供する。
 - ・ 進路先の見学や現場実習など、体験をとおして情報を提供する。
 - ・ 自己評価と他者評価を比較させることなどをとおして、自己像の修正の機会を設定する。
- 体験を重視するとともに、それをもとに思考する機会を設定する。
 - ・ 体験をまとめたり、仲間の考えを聞いたりすることで、進路に対する考えにゆさぶりを与える機会を設定する。
- 発達に応じた指導を心がける。
 - ・ 発達段階が5・6歳に達していない生徒や、5・6歳に達していても「選択ができない生徒」「意思表示が苦手な生徒」など、生徒の発達段階や特性に基づいた指導を確立する。

b 保護者への対応について

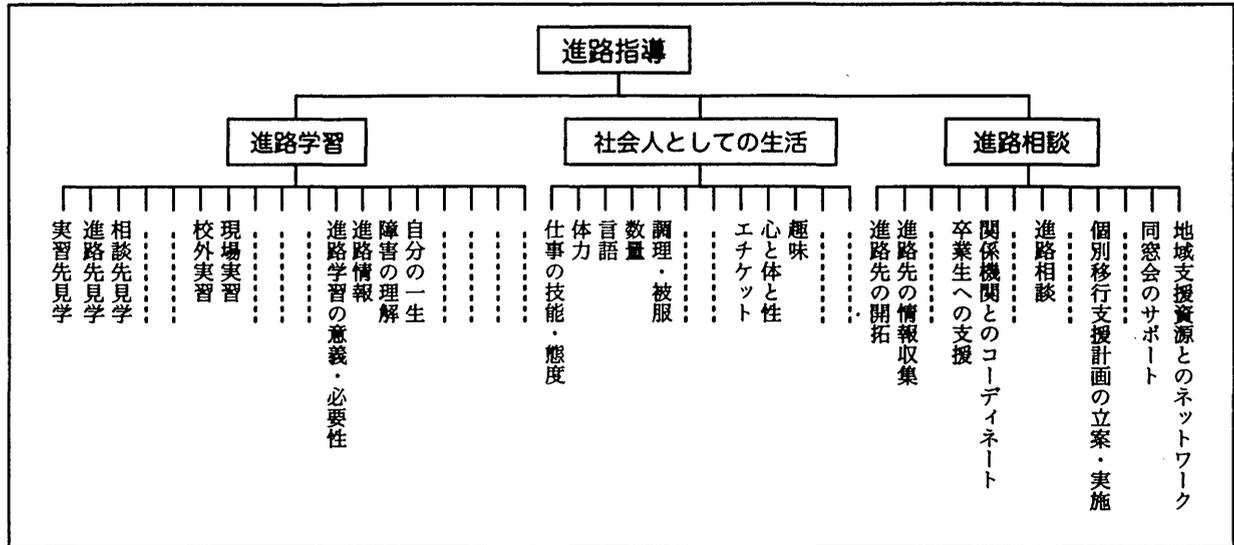
- 保護者の考えや希望をしっかり受け止める。
- 進路情報をわかりやすく提供し、母親ばかりでなく父親の進路への意識を高める。
- 実習や学校生活の様子を伝え、適性或課題を明確にとらえさせる。
- ライフステージの視点から将来の進路変更の可能性や親亡き後のこと、地域の社会資源の活用の方法についても伝える。
- 計画的な進路指導の視点からは、高等部在学中から卒業後3年までの計6年間をめどに、保護者と相談のうえ、個別移行支援計画を立案する。

c 卒業生や他機関との連携について

- 進路先開拓を積極的に行うなど、選択肢を増やすことに努める。
- 卒業生の動向の把握を行い、地域の社会資源とのネットワークを基盤に、生徒や卒業生が必要な支援をコーディネートする。

オ 進路指導の構成

以上の理念をもとに「進路指導」を「進路学習」（進路や将来の生活などを考える学習）と「社会人としての生活」（社会生活を営むうえで必要な知識・理解・技能・態度の学習）と「進路相談」（本人・保護者の本音を明らかにしながら、本人に進路の選択・決定を促す機会）の三つで構成した。



図一11 進路指導の構成

(上田文啓)

(2) 進路指導における「進路学習」の位置づけ

① 進路学習のとらえと主な内容

進路指導の理念をもとに、進路学習のとらえと内容を次のように考えた。

ア 進路学習のとらえ

進路についての情報や現場実習の経験、進路先見学などとおして、自分自身について、そして仕事や生活など、自分の生き方・在り方を考える学習。

イ 進路学習の主な内容

- ・ 進路に関心や希望をもつ
- ・ 成長の過程を振り返り、大人としての実感をもつ
- ・ 将来の自分について考える
- ・ 進路の情報を得る
- ・ 自分を見つめたり、障害を理解したりする
- ・ 情報をもとに、能力や適性を考えて実習先や進路先を考える
- ・ 実習をとおして自分の能力や適性を知り、自己理解を深める

② 個々の生徒に必要なかつ適切な進路学習の在り方

私たちは、すべての生徒が、積極的に取り組める進路学習の在り方を模索したいと願っている。そして、どの生徒も自分の進路を主体的に選択・決定できるようにと考えている。そのためには、個々の生徒の発達段階や生徒の特性に応じて、どのような指導が求められるのかを明らかにする必要がある。そこで、白石(2000)らの文献や日常の生徒の行動観察、過去の指導例などから、発達段階や生徒の特性に応じた指導の在り方について検討を行った。

ア 自分の生き方・在り方について考え、進路を選択・決定できる生徒への指導

- 5・6歳の発達段階は「もっとこんな自分になりたい」「もっとこうありたい」と未来への思い

をふくらませることが可能となる時期である。さらに、7・8歳になると一層自己客観視が進むといわれる。このことから、次のような指導の方向性が示唆される。

- 本校高等部において、知的発達段階が5歳以上の生徒は27名中14名である。これらの生徒は自分を振り返ったり将来の自分について考えたりするなどの進路学習のねらいが十分達成できると思われる。友達の考えを聞いて深く自分について考える、進路情報を参考に考えるなど、より自分を見つめ、自己理解・自己評価を深めるような指導が求められると考える。
- 一方、知的発達段階が5歳以上であっても、選択ができない生徒や意思表示が苦手な生徒も在籍する。このような生徒には、具体的な場面で自らの成長を感じるような即時評価に心がける、選択肢をわかりやすく提示するなどの配慮が必要であると考えられる。

イ 経験したなかから自分で選び、考えていこうとする生徒への指導

- 3・4歳は、「やってみよう」と思える活動が用意され、やってみて「できた」という達成感をもって「また、やろう」と思い、頑張ったことを認められて、自分への信頼を高めていく時期である。特に、4歳半のふしには単に「できた」ではなく、「自分でできた」「自分で考えてできた」が自信になるといわれる。そして、この自己信頼の高まりによって「～だけれども～する」と自制心も育ち、「運動会でがんばりたいから、練習しておこう」と、これまで培われた自信と誇りが土台となり、自分の生活や行動を意識的に作り出す主体となるともいわれる。このことから、次のような指導の方向性が示唆される。
- 知的発達段階が3・4歳の生徒は、27名中9名である。現場実習などの実際の経験を積むことにより、〇〇の仕事をしたい、〇〇に行きたいなど、自分なりの考えを言えるようになってきているとともに、現場実習後の生活のめあてなどを意識して取り組む様子もみられる。進路先見学で実際に見る、現場実習で実際に経験することをとおして自分を見つめ、考えを深め、自分で「やっぱりこっち」と選び取り、決めたことに対して努力していけるような指導が求められると考える。
- また、進路学習を積み重ねることで、将来への見通しや目的をもち、明確な意識が育つ段階であると考えられる。将来の生活や仕事への見通しや意欲を高める学習も意図的に段階的に取り入れることが大切である。

ウ 活動をとおして、好き嫌いや欲求を伝えようとする生徒への指導

- 1歳半のふしを迎えると、自分の行動の主人公として、自分なりの目的をもって行動しようとする。そのため、他者から一方的に指示されることに対して、はっきり「いや」を表現するようになる。しかし、「拒否するばかりでなく、他者からの要求が自分の目的につくりかえられるときには自分をコントロールしようとする」といわれる。また、2歳代後半になると「～してから～する」という力がふくらむといわれる。このことから、次のような指導の方向性が示唆される。
- 知的発達段階が1歳半から2歳の生徒は、27名中4名である。活動に対する取り組み方に生徒の気持ちが顕著にあらわれるため、本人が何をがんばろうとしているのか、他者の意図と自分の意図のせめぎ合いのなかでどう自分をつくらうとしているのかについて、表情や取り組みの様子、視線や発声などから気持ちを読み取り、本人に確認していく配慮が必要である。同じ活動を繰り返すことや、一定期間繰り返すなど見通しをもって取り組めるような活動の工夫をするとともに、繰り返した際の様子の変化もとらえておくことが大切であると考えられる。
- 明確に意思を伝えることが困難な発達段階ではあるが、具体的な写真カードや絵、動作、指さしなどで聞かれたことや自分の意思を伝えようとする気持ちを育てること、必要性をもたせること、習慣化していくことも必要と思われる。

(和田充紀)

③ 進路学習の年間指導計画

ア 進路学習のねらい

進路学習のねらいは、(2)①の「進路学習のとらえと主な指導内容」より、「進路についての情報や現場実習の経験、進路先見学などをとおして、自分自身について、そして仕事や生活など、自分の生き方・在り方を考える」とし、各学年ごとのねらいを以下のように設定した。

1年生：○いろいろな職業や進路先を知り、働くことや仕事への関心をもつ。

○自分の成長の様子を振り返ったり、卒業後の生活について知ることによって進路に対する大まかな見通しをもつとともに、自分自身を見つめる力をつける。

2年生：○いろいろな仕事や進路先に関する知識や理解を深める。

○働くことや進路先への意識を高め、進路選択への関心を高める。また、働く経験を広げ、自分自身の生き方・在り方について考える力をつける。

3年生：○自己の適性など自己理解を深め、自分自身の生き方・在り方を考える力を確かなものにし、自ら進路の選択・決定ができるようにする。

○将来の自分について考え、社会人としての自覚をもつ。

イ 進路学習の内容および指導形態、学習グループについて

進路学習に関する指導内容については、進路の選択・決定に必要な基礎・基本となる内容を「進路学習のとらえ」「発達の理論と生徒の実態」「ホームルーム、生活Ⅲ、生活単元学習、内容表試案の指導内容」より導き、新たに指導内容としたり、整理、統合したりした。これらの指導内容については、今後、実践をとおして加除修正を加えていく。

進路学習を行う指導形態については、ホームルーム、生活単元学習、総合的な学習の時間とし、各指導形態で行う単元を以下のように設定した。

表-7 指導形態別単元一覧

学年	ホームルーム	生活単元学習	総合的な学習の時間
1年	◎進路について学んで自分を見つめよう	◎校外実習で働くことを経験しよう①②	◎実習先について調べよう
2年	◎進路について学んで自分を広げよう	◎現場実習で経験を広げよう①②	◎進路先見学を計画しよう
3年	◎進路について学んで自分の生き方・在り方を考えよう	◎進路先を決めるために現場実習をしよう①②	◎相談先を見学に行こう

また、学習グループについては、生活経験や生活年齢、学級の仲間意識の視点などから、これまで行ってきた学年別の学習グループを基本として実施するようにしている。ただし、内容によっては、個々の生徒のニーズという点から個に応じた内容や活動を設定し、課題別グループでの学習を実践し、内容の整理、精選や教材教具の充実を図りたいと考えている。

ウ 進路学習の年間指導計画

進路学習の年間指導計画は、次の表-8のとおりである。なお、この計画は、5・6歳の発達段階にある生徒を基本に考え作成したものであり、それに達しない生徒の指導計画は今後の課題である。表中の「◎」は単元名、「○」は題材名、「・」は題材のなかの主な指導内容を示している。また、()は指導形態を示している。(HR)：ホームルーム、(生単)：生活単元学習、(総合)：総合的な学習の時間。☆進路相談は、進路学習に含まれないが関連する事項なので記している。

表-8 進路学習の年間指導計画一覧

月	1 年 生	2 年 生	3 年 生
4	<p>◎進路について学んで自分を見つめよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○進路学習について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・進路に対する興味をもつ ・1年生の進路学習の内容を知る ○自分の成長年表をつくらう <ul style="list-style-type: none"> ・成長年表の内容を知る ・中学生と高校生の違いを知る ・成長の様子を知る 	<p>◎進路について学んで自分を広げよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○進路学習について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・進路選択に対する意欲をもつ ・2年生の進路学習の内容を知る ○自分のPR表をつくらう <ul style="list-style-type: none"> ・PRすることについて考える ・1年間の自分の成長を感じる ○進路情報について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・会社の仕事について知る ・施設の仕事について知る ・入所施設、通勤寮やグループホームなどの生活の場を知る ○自分の進路について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・企業就労、福祉的就労、進学の違いを考える 	<p>◎進路について学んで自分の生き方・在り方を考えよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○進路学習について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・進路決定に対する意欲をもつ ・3年生の進路学習の内容を知る ○自分のプロフィール表をつくらう <ul style="list-style-type: none"> ・プロフィール表の内容を考える ・高校3年間の自分の成長を見つめる ○進路情報を活用しよう <ul style="list-style-type: none"> ・進路決定までの手順を知る ・必要な手続の仕方について知る ・給料や年金について知る ・希望する進路先の状況について知る ○卒業後の進路について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・家族と話し合うことの大切さを知る ・親が亡くなった先輩の生活を知る
5	<ul style="list-style-type: none"> ○働くことについて考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・家族の仕事を知る ・いろいろな職業を知る ・働く人の一日を知る ・どんな仕事をしたいか考える 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の進路について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・会社や施設、通勤寮やグループホームなどの生活の場を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ○卒業後の進路について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・家族と話し合うことの大切さを知る ・親が亡くなった先輩の生活を知る
6	<p>◎校外実習で働くことを経験しよう① (生単)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○校外実習について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・仕事の内容を知る ・自分の生活を振り返る ・仕事の練習をする ・実習に対する意欲をもつ ○実習を頑張ろう <ul style="list-style-type: none"> ・めあてを意識して仕事をする ・仕事をした満足感を感じる ○実習を振り返ろう <ul style="list-style-type: none"> ・めあてについて自分で評価をする ・実習を終えた充実感をもつ 	<p>◎現場実習で経験を広げよう① (生単)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○現場実習について見直しをもとう <ul style="list-style-type: none"> ・2年生の実習の意味を知る ○いろいろな仕事をしてみよう <ul style="list-style-type: none"> ・実習に対する意欲をもつ ○仕事に挑戦しよう <ul style="list-style-type: none"> ・めあてを意識して仕事をする ・実習先の人との接し方に慣れる ・通所と入所の違いを経験してわかる ・自分の力を試す ・進路先への不安やゆれを感じながらも実習を終えた満足感を感じる 	<p>◎進路先を決めるために現場実習をしよう① (生単)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○現場実習について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・3年生の実習の意味を考える ・めあてを考えよう ○仕事を確実にしよう <ul style="list-style-type: none"> ・実習先の仕事をする ・実習に対する意欲をもつ ○進路の決定をめざして仕事をしよう <ul style="list-style-type: none"> ・進路先を意識して仕事に取り組む ・実習先の人との接し方に慣れる ・希望する進路先の現状を知る
7	<p>◎進路について学んで自分を見つめよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○進路情報について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・企業就労、福祉的就労、進学の違いを知る ・通所と入所の違いを知る ・先輩の進路先の名前を知る ○先輩の実習先を見学しよう① <ul style="list-style-type: none"> ・実習先を見学する ・見学した感想を話し合う ○自分について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・得意なこと、苦手なことを考える ・自己評価と教師の評価の違いを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ○実習を振り返って自分の進路に見直しをもとう <ul style="list-style-type: none"> ・実習に対する気持ちを表現する ・実習先の評価と自己評価の違いについて考える ・実習を対して充実感をもつ ・自分の進路に見直しをもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ○実習を振り返って自分で進路を選択・決定できるようにしよう <ul style="list-style-type: none"> ・進路先の評価や現実を受け止める ・実習先が自分に合うか考える ・実習にたいして充実感をもつ ・進路の選択・決定に見直しをもつ
9	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなで進路先を見学しよう <ul style="list-style-type: none"> ・見学に行く進路先について知る ・進路先を見学する ・進路先に興味関心をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなで進路先を見学しよう <ul style="list-style-type: none"> ・見学先の仕事や自分の好きな仕事か考える ・見学先の生活が自分は好きか考える ○進路情報について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・「福祉の手引き」について知る 	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなで進路先を見学しよう <ul style="list-style-type: none"> ・見学先が自分の進路先にできるか考える ・見学先の生活が自分の生活の場になるか考える
10	<p>◎校外実習で働くことを経験しよう② (生単)</p> <p>※指導内容については「校外実習で働くことを経験しよう①」の題材で取り上げた指導内容に準じながら学習する</p>	<p>◎現場実習で経験を広げよう② (生単)</p> <p>※指導内容については「現場実習で経験を広げよう①」の題材で取り上げた指導内容に準じながら学習する</p>	<p>◎進路先を決めるために現場実習をしよう② (生単)</p> <p>※指導内容については「進路先を決めるために現場実習をしよう①」の題材で取り上げた指導内容に準じながら学習する</p>
11	<p>◎進路について学んで自分を見つめよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○進路情報について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・進路先の名前を知る ・進路先の仕事について知る ○先輩の実習先を見学しよう② <ul style="list-style-type: none"> ※指導内容については「先輩の実習先を見学しよう①」に準じて学習する ○自分について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・友達の得意、苦手について話し合う ・友達の評価と自己評価の違いを知る ・自分の課題がわかる 	<p>◎進路について学んで自分を広げよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・自分のできることとできないことがわかる ○進路情報について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・日中受け入れ制度について知る ・デイサービスについて知る ・通勤寮やグループホームの生活について考える 	<p>◎進路について学んで自分の生き方・在り方を考えよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分を見つめよう <ul style="list-style-type: none"> ・先輩の生活から自分の生活を考える ・余暇の過ごし方について話し合う ○相談できるところを知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・相談先での相談の手順について知る ・市役所の障害福祉課について知る ・ハローワークについて知る ・育成会の相談窓口について知る
12	<p>◎実践先について調べよう (総合)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見学する実践先を調べる ・実習先見学の計画を立てる ・実践先を見学する ・見学した様子について話し合う 	<p>★進路相談 <1月中></p> <p>◎進路先見学を計画しよう (総合)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見学する進路先を調べる ・進路先見学の計画を立てる ・進路先を見学する ・見学した内容についてまとめる 	<p>◎相談先を見学に行こう (総合)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談先を調べる ・相談先見学の計画を立てる ・相談先を見学する ・見学した内容について発表する
1	<p>★進路相談 <2月中></p> <p>◎進路について学んで自分を見つめよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の進路について話し合おう <ul style="list-style-type: none"> ・現場実習先を考える ○自分について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・障害について知る ・療育手帳について知る ・先輩のライフステージを知る 	<p>◎進路について学んで自分を広げよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の進路について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・自分の力に合った進路先を考える ○自分について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・障害について考える ・自分の限界や可能性を知る ・自分のライフステージを考える 	<p>◎進路について学んで自分の生き方・在り方を考えよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分を見つめよう <ul style="list-style-type: none"> ・卒業後の生活について話し合う ○将来の設計図をつくらう <ul style="list-style-type: none"> ・結婚について知る ・親や兄弟の将来について考える ○社会人について学ぼう <ul style="list-style-type: none"> ・青年学級や同窓会について知る
2	<p>◎進路について学んで自分を見つめよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の進路について話し合おう <ul style="list-style-type: none"> ・現場実習先を考える ○自分について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・障害について知る ・療育手帳について知る ・先輩のライフステージを知る 	<p>◎進路について学んで自分を広げよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の進路について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・自分の力に合った進路先を考える ○自分について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・障害について考える ・自分の限界や可能性を知る ・自分のライフステージを考える 	<p>◎進路について学んで自分の生き方・在り方を考えよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分を見つめよう <ul style="list-style-type: none"> ・卒業後の生活について話し合う ○将来の設計図をつくらう <ul style="list-style-type: none"> ・結婚について知る ・親や兄弟の将来について考える ○社会人について学ぼう <ul style="list-style-type: none"> ・青年学級や同窓会について知る
3	<p>◎進路について学んで自分を見つめよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の進路について話し合おう <ul style="list-style-type: none"> ・現場実習先を考える ○自分について知ろう <ul style="list-style-type: none"> ・障害について知る ・療育手帳について知る ・先輩のライフステージを知る 	<p>◎進路について学んで自分を広げよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の進路について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・自分の力に合った進路先を考える ○自分について考えよう <ul style="list-style-type: none"> ・障害について考える ・自分の限界や可能性を知る ・自分のライフステージを考える 	<p>◎進路について学んで自分の生き方・在り方を考えよう (HR)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分を見つめよう <ul style="list-style-type: none"> ・卒業後の生活について話し合う ○将来の設計図をつくらう <ul style="list-style-type: none"> ・結婚について知る ・親や兄弟の将来について考える ○社会人について学ぼう <ul style="list-style-type: none"> ・青年学級や同窓会について知る

(田口眞弓)

(3) 教育課程の再編成に向けた提言

高等部は、進路指導の視点から本校教育における「めざす人間像」や「学校教育目標」、「一貫教育の視点」などを提言するという役割を担い、研究を進めている。今年度は研究の途上であり、明確に提言を行うことはできないが、次年度研究を深めることで、次のような観点から提言が行えるという見通しをもつことができた。

① 本校教育における「めざす人間像」や「学校教育目標」などに関する提言

今年度、進路指導の理念を構築するなかで、進路指導におけるめざす生徒像を「自ら進路を切り拓く生徒」、そして、その具体的な生徒像を「主体的に行動しようとする生徒」「いろいろな場面において自分自身で選択・決定する生徒」などであるにとらえた。それは、このような主体的な姿勢が、生徒たちの自立や社会参加につながると考えたからである。次年度、これら「自立・社会参加・進路を切り拓く」といったキーワード相互の関係づけを図るとともに、進路学習の実践をとおして得られる生徒の具体的な姿から、高等部としての考えを確立し全校的に提言していきたい。

② 高等部教育課程に関する提言

ア 高等部の内容領域に関する提言

進路指導の理念において、「自分の生き方・在り方を考える」といった「自己を見つめる」内面を育むことの重要性を示した。ところで、現教育課程では、高等部の内容領域として「ことば」「つきあい」「くらし」「しごと」「たのしみ」「からだ」「たいど」といった領域を設定しているが、今回、進路指導の理念で重要性を示した「自己を見つめる」内面は、この領域のなかには明確な言葉として含まれていない。次年度、この「自己を見つめる」内面を内容領域「たいど」の下位項目として位置づけるか、もしくは新たな内容領域、たとえば「自分」といったものを設定するか検討を行う必要がある。いずれにしても、今回、進路指導の視点から導かれた「自己を見つめる」内面を育む内容領域などが、教育課程に明確に位置づけられることは、今回の研究の大きな成果であるとする。

イ 進路学習にかかわる指導形態に関する提言

今回、私たちは進路学習のとらえを行うとともに、進路学習をホームルームや生活単元学習、総合的な学習の時間といった指導形態において指導することとした。このことは、必然的に現教育課程におけるホームルームの単元・題材・指導内容を見直すとともに、総合的な学習の時間を検討することにつながった。次年度は、進路学習の実践を行うなかから、指導形態に矛盾はないか、ホームルームの他の単元との関係において授業時数は適当か、といった点について検討を行うことで、ホームルームや総合的な学習の時間に関しても改善がなされると考える。

5. 今後の研究計画

最後に、次年度高等部として取り組むべきことを記して、高等部の研究を締めくくりたい。

(1) 今年度の研究で不十分な点について再度検討を行う。

- 文献や生徒の行動観察から、進路を選択・決定するために必要な力を探り理論づける。
- 5・6歳の発達段階に達していない生徒たちに対する進路学習の年間指導計画を立案する。
- 「在り方・生き方」、「自分こわし自分づくり」などのキーワードの概念規定を行う。

(2) 進路学習の実践をとおして次のことを検討する。

- 進路指導の理念、進路学習のとらえ・教育課程上の位置づけ・年間指導計画は適切か
- 発達段階に応じた進路学習の指導の在り方とは ○有効な指導法・教材教具の開発蓄積

(3) 高等部教育課程や本校教育課程再編成に向けて次の視点から提言を行う

- ① 本校教育課程に関して：○めざす人間像 ○学校教育目標 ○一貫教育の視点
- ② 高等部教育課程に関して：○めざす生徒像 ○高等部教育目標 ○内容領域
○ホームルームや総合的な学習の時間の指導計画

(宮崎耕二)

V 全体研究のまとめ

研究その2は、教育課程の再編成につながる提言を行うことを目的としている。最後に、各部の研究から、教育課程再編成に向けて、次年度どのような提言が得られるか、その展望について述べる。

小学部は、一人ひとりの教育的ニーズに応じた柔軟な教育課程の在り方を提言する役割を担った。主な研究成果は、次の二点であった。①教育的ニーズのとらえを行ったこと。②「教育的ニーズに応じた授業づくりシステム」を構築するうえで必要な「発達のニーズ」と「生活のニーズ」を把握する方法を探ったこと。次年度は、授業実践をとおして「教育的ニーズに応じた授業づくりシステム」の具体化を行う。そして、授業実践の過程において生じる課題、たとえば、個別の指導計画と教育課程の関係とは、といったことに対してどのように対応するかを検討していくなかから、教育内容の枠組みや指導形態の在り方といった、柔軟な教育課程再編成へ向けた手がかりを探っていく。これは、小学部のみならず中・高等部にとっても応用可能な有用な提言となるであろうと考える。

中学部では、発達の転換期として重要視される中学部の生徒たちの発達をとらえとともに、この時期、特に重要な「からだの学習」の在り方を、小・高等部との関係で検討する役割を担った。主な研究成果の一点目は、中学部生徒の発達を知的発達・身体発達・社会性の発達の調査、および文献研究をとおして検討し、この時期に大切にすべきことを、知的好奇心・親からの心理的自立・社会的行動を維持する力であるにとらえたことである。次年度は、今年度実施した諸調査・検査に加え、心理的発達などの調査も行い、生徒たちの全人的な発達の様相を把握し、中学生の発達のとらえを行う。そして、この発達のとらえに、次年度、高等部が提示する本校教育における「めざす人間像」などの視点を加味して検討することで、中学部教育で大事にすべきものなどが、新たにみえてくるものと考ええる。研究成果の二点目は、からだの学習に関する進路先（施設）・学校・家庭などにおけるニーズを把握したことである。これによって、必要性の高い内容や、個に応じた指導を行うことの重要性、小・高等部にも必要な指導内容などがみえてきた。この成果をふまえ、次年度、個々のニーズに応じた「からだの学習」を展開するなかから、内容の選択・組織の仕方、指導計画の立て方、集団編成の在り方といった点について提言がなされるものと考ええる。また、指導内容についての提言は、小・高等部にとって有用なものとなるものと考ええる。

高等部は、進路指導の視点から「学校教育目標」など、本校教育の理念を提言する役割を担った。研究成果の一点目は、進路指導の理念を構築したことである。そのなかで、高等部では、進路指導においてめざす生徒像を「自ら進路を切り拓く生徒」、そして、その具体的な生徒像を「いろいろな場面において、自分自身で選択・決定し、主体的に行動しようとする生徒」などであるにとらえた。これは、進路指導においてめざす生徒であるとともに、学校教育全体としてめざす人間像であるのではないかと考えられた。次年度は、高等部の進路指導の理念から導いた「自立」「社会参加」「進路を切り拓く」といったキーワード相互の関係づけを図るとともに、卒業生の生活の実態調査などから得られる知見を加味して検討することで、本校教育の理念につながる提言がなされるものと考ええる。研究成果の二点目は、進路学習のとらえ・年間指導計画（案）を作成したことである。これについては、次年度、進路学習にかかわる指導形態についても検討がなされるとともに、高等部が進路指導において重要であると考えた、「自分を見つめる」内面を育む内容領域などを、教育課程に位置づけていくための提言も得られるものと考ええる。

本年度は、各部とも基礎的研究を中心に行った。次年度は各部とも、それぞれの研究を進める一方、各部からの提言や卒業生の生活の実態調査なども合わせて検討することで、全体的な研究の成果として、研究その3に向け、教育課程再編成への手がかりをまとめていきたい。また、次年度も、今回、共同研究教官として協力いただいた4名の先生方に、引き続き研究に加わっていただくことで、研究をさらに深めていきたい。

(宮崎耕二)

《文献》

I 全体研究について

- 長崎大学教育学部附属養護学校（1981）教育課程の編成—教育課程の編成の手順をさぐる—。研究紀要第5集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1995）自立を支える指導法の研究～自ら考えて行動する子供を育てる授業のあり方を探る～。研究紀要第12集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1997）子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～。研究紀要第13集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1999）子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～（その2：形成的評価から授業改善の方法を考える）。研究紀要第14集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2002）教育課程の再編成その1—アセスメント機能をもった内容表試案を作成し、指導形態等の改善の手がかりを探る—。研究紀要第15集
- 文部省（2000）盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領（平成11年3月）解説—総則等編—。海文堂出版株式会社
- 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2001）21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～（最終報告）
- 日本教育大学協会第二設置委員会（2001）「附属学校園の役割」に関するアンケートについて
- 山田優一郎（1999）進路の現状と卒業後の生活。坂井清泰・小畑耕作（編著），青年期の進路を拓く。かもがわ出版，126-142
- 坂井清泰（1999）青年期の発達と進路。坂井清泰・小畑耕作（編著），青年期の進路を拓く。かもがわ出版，142-168
- 山口大学教育学部附属養護学校（1999）個人指導プログラムに基づく学習指導の組織化と展開—生活する力を育てる学習指導の展開II
- 全国知的障害養護学校長会（1999）新しい教育課程と学習活動Q&A特殊教育<知的障害教育>。東洋館出版

II 小学部の研究

- 宇佐川浩（2001）障害児の発達支援と発達臨床—発達心理学からみた子ども理解—。全国心身障害児福祉財団
- 坂本龍生（1987）田川元康・竹田契一・松本治雄（編），障害児理解の方法—臨床観察と検査法—。学苑社，14，24-27，158-159
- 財団法人田中教育研究所（編）（1987）田中ビネー知能検査法。田研出版株式会社，16-21，44
- Eシヨプラー・茂木俊夫（1995）PEP-R教育診断検査。川島書店，17-31
- 生澤雅夫（2001）新版K式発達検査法—発達検査の考え方と使い方—。ナカニシヤ出版
- 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2001）21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～（最終報告）
- 金子健（2003）見せかけの改革に終わらせないために。当事者を中心に据えて。実践障害児教育，356，10-11，学研
- 竹林地毅（2001）個別の指導計画作成における教育的ニーズの把握。日本特殊教育学会第39回大会論文集
- 清水貞夫（1997）特別な教育的ニーズ。障害児教育大事典。旬報社，622
- 越野和之（1997）特別な教育的ニーズの診断。障害児教育大事典。旬報社，622-623
- 東京学芸大学教育学部附属養護学校（2001）個別の教育的ニーズにこたえる教育課程をめざして。個別教育計画を重視した授業とその評価の方法。研究紀要No.46
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2002）教育課程の再編成その1—アセスメント機能をもった内容表試案を作成し、指導形態等の改善の手がかりを探る—。研究紀要第15集
- 高山佳子（2000）特別なニーズ教育とは。高山佳子（編）。個別教育計画のためののはじめてのニーズ教育。援助が必要な子どものQOLをめざして。第1章。川島書店，1-21
- 高橋智・前田博行・猪狩恵美子・是永かな子・千賀愛（2000）特別ニーズ教育研究の動向。SNEの概念と研究のストラテジー。SNEジャーナル。5（1），258-271

- 岩手大学教育学部附属養護学校（2002）個別の教育的ニーズにこたえる教育課程と授業の実践。研究紀要第11集
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校（2000）一人一人の子供の将来の豊かな生活につながる教育課程の編成はどうあればよいか。個々の教育的ニーズの把握と指導内容・方法の整備。研究紀要第12集
- 鹿児島大学教育学部附属養護学校（2001）一人一人の子供の将来の豊かな生活につながる教育課程の編成はどうあればよいか。個々の教育的ニーズの把握と指導内容・方法の整備。研究基調。研究紀要第13集
- 山口大学教育学部附属養護学校（2000）「生活する力」を育てるための個人指導プログラムの充実をめざして。平成11年度研究集録
- 山口大学教育学部附属養護学校（2001）個人指導プログラムに基づく「総合的な学習」の展開。一人一人と「豊かな生活」をめざして。平成12年度研究集録
- 山口大学教育学部附属養護学校（2002）個人指導プログラムに基づく「総合的な学習」の展開。一人一人と「豊かな生活」をめざして。（2年次）。平成13年度研究集録
- 和歌山大学教育学部附属養護学校（2002）地域生活を視野に入れた個別指導計画づくり。ニーズの明確化。研究集録第12号
- 徳島県立阿南養護学校（1999）個別指導計画作成の手引き
- 長崎県立鶴南養護学校（2003）一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程はどうあるべきか。平成14・15年度研究紀要

III 中学部の研究

- 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2001）21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～（最終報告）
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1995）自立を支える指導法の研究～自ら考えて行動する子供を育てる授業のあり方を探る～。研究紀要第12集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1997）子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～。研究紀要第13集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1999）子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～（その2：形成的評価から授業改善の方法を考える）。研究紀要第14集
- 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会（1999）1999年調査。児童・生徒の性～東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告。学校図書
- 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会（2002）2002年調査。児童・生徒の性～東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告。学校図書
- 長崎・障害児への性教育を考える会編（1996）イラストでわかる養護学校の性教育事典。明治図書
- 角田禮三（1994）障害のある子どもの性教育相談。明治図書
- 齋藤万比古（1997）感情の発達（通常と異常）。有馬正高・太田昌孝（編），発達障害医学の進歩No.9。診断の治療社，1-11
- 大塚厚子（2002）思春期の心の指導内容。相磯幸之朗・内野宏史・大塚厚子・川島久美子・中村由紀子・藤田和子・水越俊行・村山哲哉・柳瀬さち子（編著）。だれにでもできる性教育。小学館，33
- 茂木俊彦（2000）障害児の思春期・青年期と教育。船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門。全国障害者問題研究会出版部，13-30
- 白石恵理子（2000）障害児の思春期・青年期と発達。船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門。全国障害者問題研究会出版部，31-50
- 森川建基（2000）てんかん。船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門。全国障害者問題研究会出版部，51-63
- 小川勝彦（2000）肥満・成人病。船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門。全国障害者問題研究会出版部，64-76
- 石澤卓夫（2000）精神障害。船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門。全国障害者問題研究会出版部，77-90

Ⅳ 高等部の研究

- 長崎大学教育学部附属養護学校（1981）教育課程の編成－教育課程の編成の手順をさぐる－. 研究紀要第5集
- 文部省（2000）盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領（平成11年3月）解説－総則等編－. 海文堂出版株式会社
- 長崎大学教育学部附属養護学校（1997）子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善～一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～. 研究紀要第13集
- 長崎大学教育学部附属養護学校（2002）教育課程の再編成その1－アセスメント機能をもった内容表試案を作成し、指導形態等の改善の手がかりを探る－. 研究紀要第15集
- 内海淳（2000）進路指導の実践と論点. 渡辺健治・清水貞夫（編著），障害教育方法の探求－課題と論点－. 田研出版，157-169
- 越野和之（2000）後期中等教育の実践と課題. 渡辺健治・清水貞夫（編著），障害児教育方法の探求～課題と論点～. 田研出版，143-156
- 白石恵理子（2000）障害児の思春期・青年期と発達. 船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門. 全国障害者問題研究会出版部，31-50
- 石澤卓夫（2000）精神障害. 船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門. 全国障害者問題研究会出版部，77-90
- 森下芳郎（2000）教科教育～青年期教育をどうつくるか. 船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門. 全国障害者問題研究会出版部，97-118
- 渡辺昭男（2000）青年期教育実践を読み解く. 船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門. 全国障害者問題研究会出版部，197-216
- 三木一平（1999）進路指導の体制と流れ－神戸大学発達科学部附属養護学校の場合. 坂井清泰・小畑耕作（編著），青年期の進路を拓く－発達保障の進路指導. かもがわ出版，169-185
- 白石正久（1998）子どものねがい・こどものなやみ－乳幼児の発達と子育て. かもがわ出版
- 白石正久（2000）発達の扉＜上＞－子どもの発達の道すじ－. かもがわ出版
- 白石正久（2000）発達の扉＜下＞－障害児の保育・教育・子育て－. かもがわ出版
- 白石正久（2000）発達障害論第1巻研究序説. かもがわ出版
- 熊本大学教育学部附属養護学校（2002）「共に育む教育を求めて」～教育基盤の改善と新しい教育課程に対応した実践研究～. 研究紀要24
- 宮城教育大学附属養護学校（1999）一人一人の生活を豊かにする教育をめざして（1年次）. 研究紀要第32集
- 宮城教育大学附属養護学校（2000）一人一人の生活を豊かにする教育をめざして（2年次）. 研究紀要第33集
- 宮城教育大学附属養護学校（2001）一人一人の生活を豊かにする教育をめざして（3年次）. 研究紀要第34集
- 宇都宮大学教育学部附属養護学校（1999）一人一人の豊かに生きる力を育む教育の実践. 研究紀要第17号
- 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2001）21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～（最終報告）
- 全国特殊学校長会（2002）障害児・者の社会参加をすすめる個別移行支援計画. ジアース教育新社
- 高木秀明（1999）青年期. 中島義明・安藤清志・子安増生・板野雄二・繁樹算男・立花政夫・霜田祐司（編），心理学辞典. 有斐閣，501-502
- 長澤正樹（2001）重度知的障害のある児童生徒を対象とした自己選択の実態. 発達障害研究. 23(1)，54-62
- 須田正信・黒田健次（1996）精神遅滞者の就労選択時における自己決定について. 発達障害研究. 18(1)，68-75
- 秦安雄（1986）青年期・成人期障害者の発達をめぐる諸問題－2次元可逆操作期前後と労働参加－. 障害者問題研究. 46，11-23
- 藤田誠（2000）教育課程における進路の学習の位置づけと実際. 全日本特殊教育研究連盟（編），発達の遅れと教育第519号. 日本文化科学社，4-7
- 任海園子（2000）性教育～心とからだの主人公に. 船橋秀彦・森下芳郎・渡辺昭男（編著），障害児の青年期教育入門. 全国障害者問題研究会出版部，119-135
- 全国知的障害養護学校長会（2002）私たちの進路. ニチブン
- 肢体不自由教育講座編集委員会（1988）進路・生活肢体不自由教育講座第6巻. 三沢義一・三ツ木任一（編著），日本肢体不自由児協会